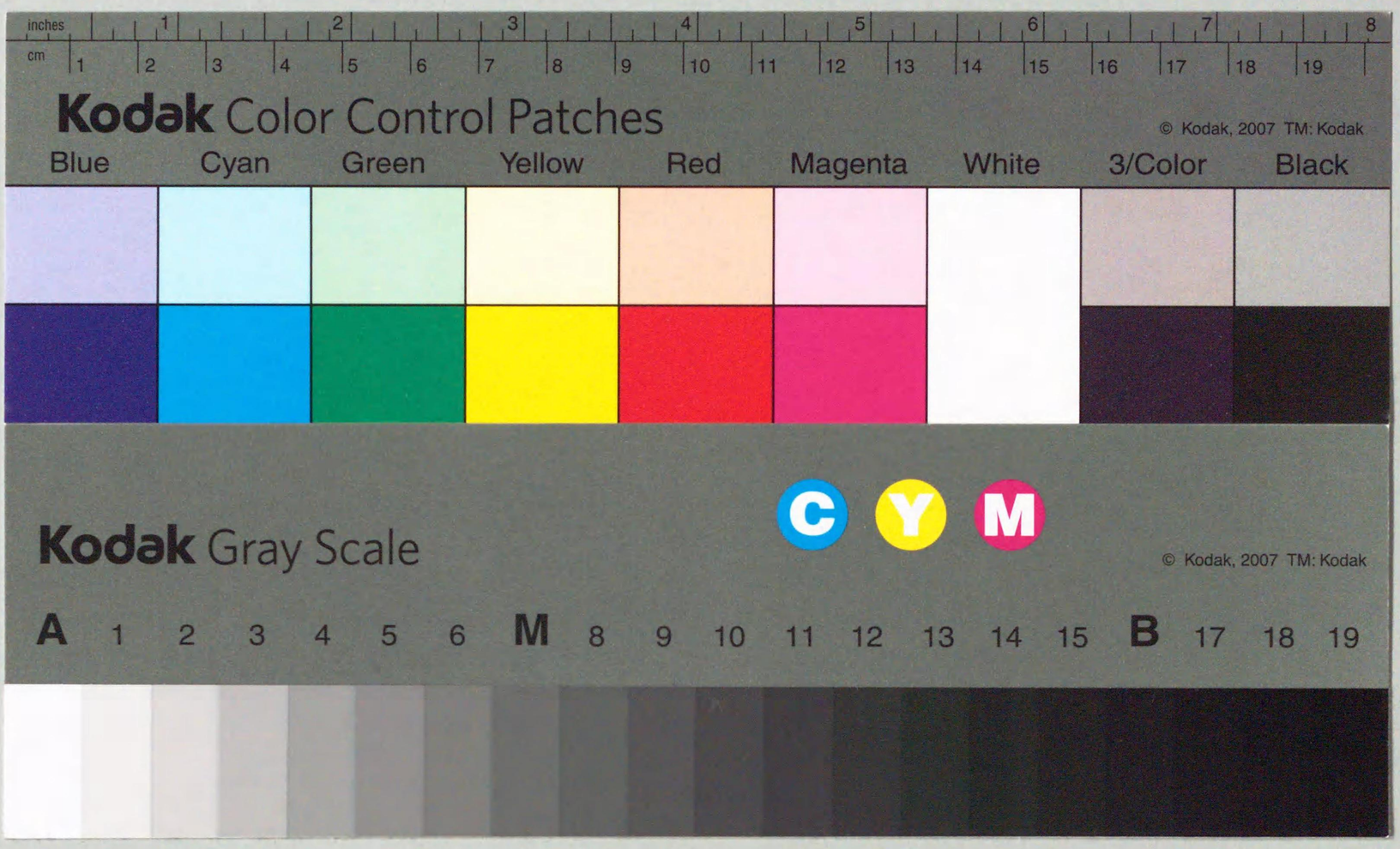
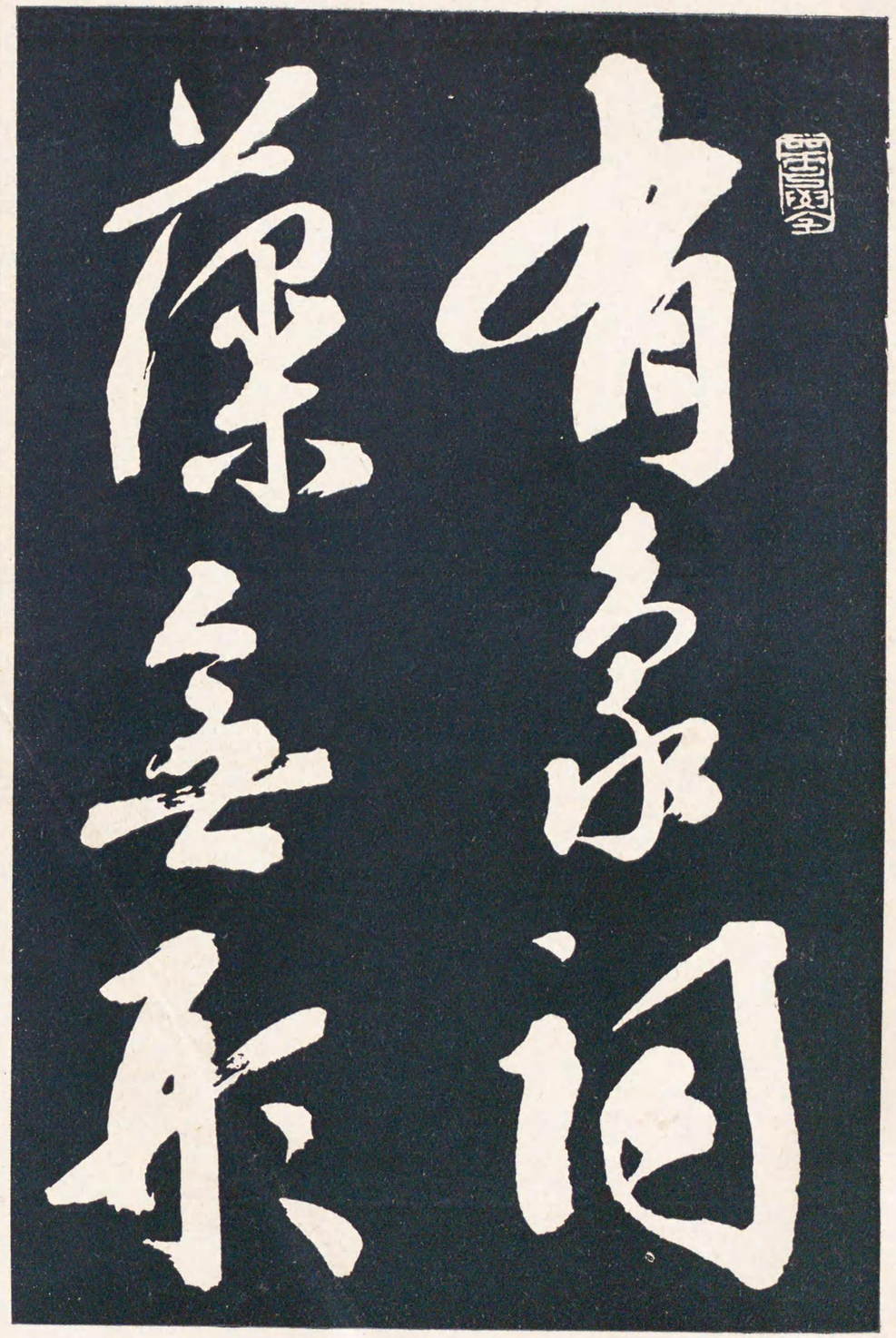
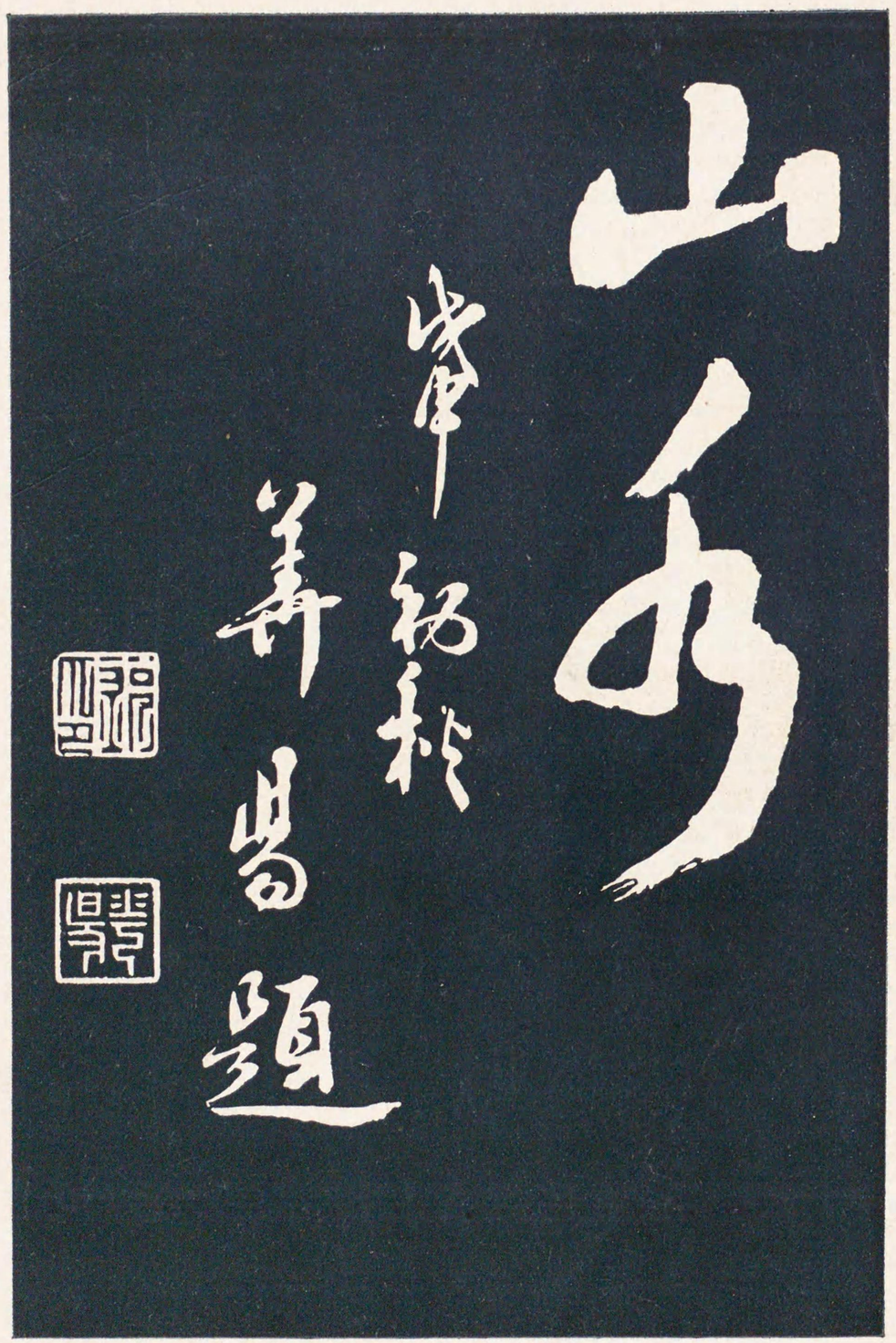


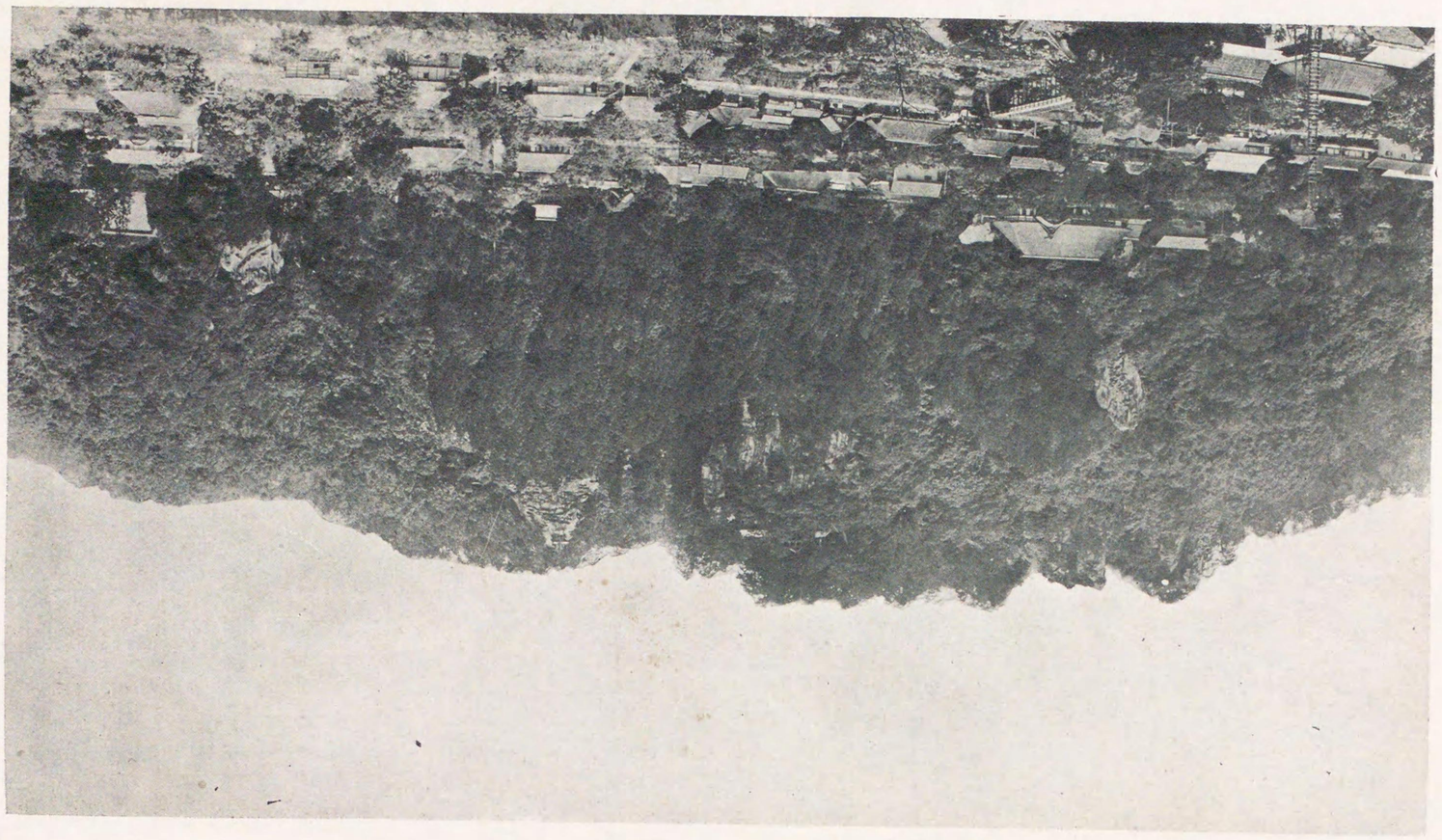
Y994-J2851
12007013646646

Y994
J2851

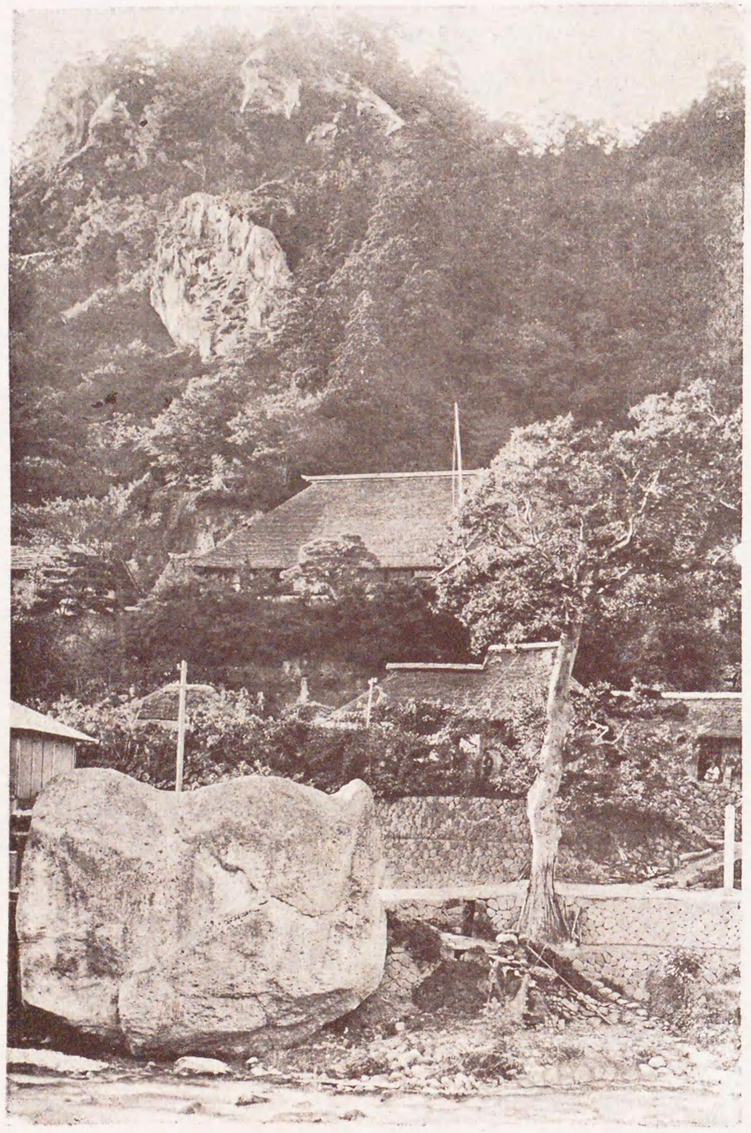
國立國會圖書館藏書
I 種
W
1200701364646


有象同
藻無乖

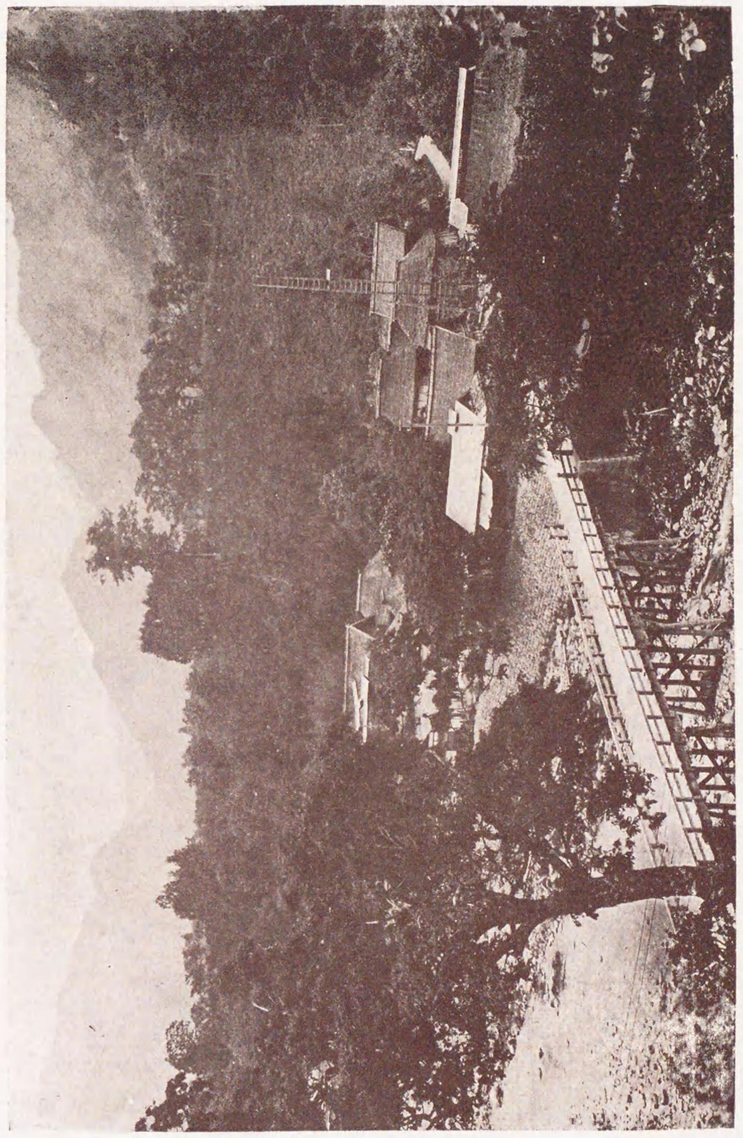

山人好
岑中初秋
善書題



景全内境寺石立山珠寶

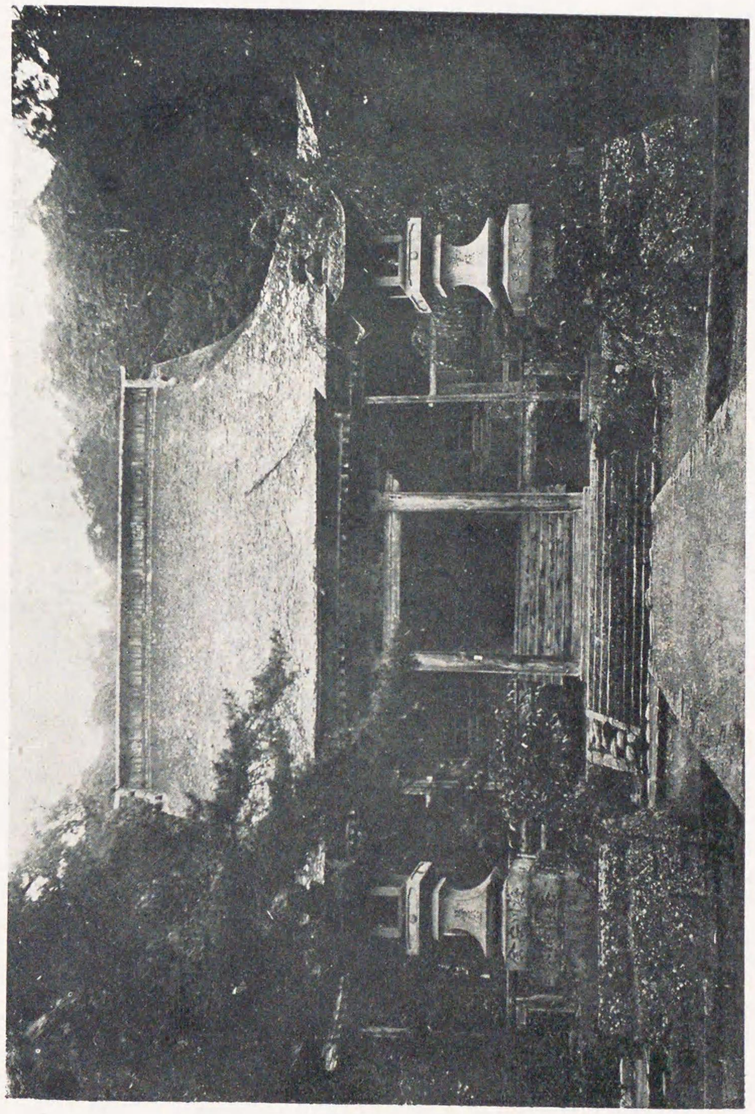


寶珠山立石寺



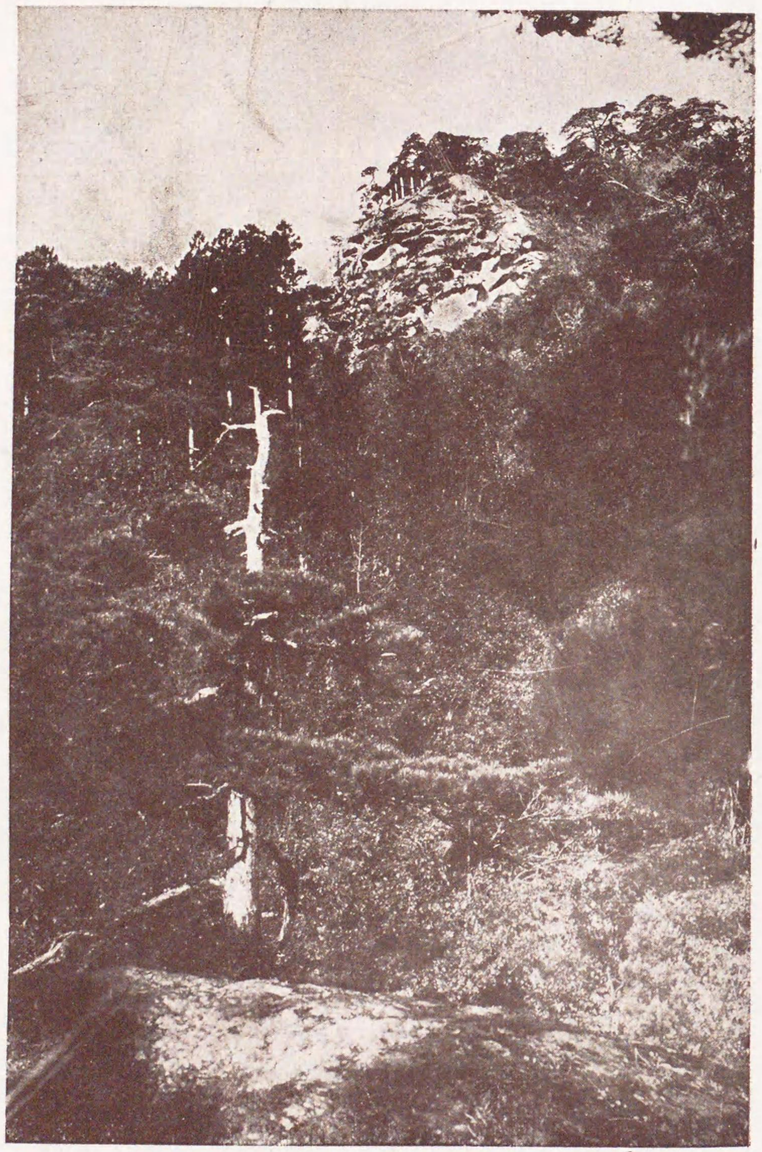
立谷川ノ清流

清和帝御寶塔

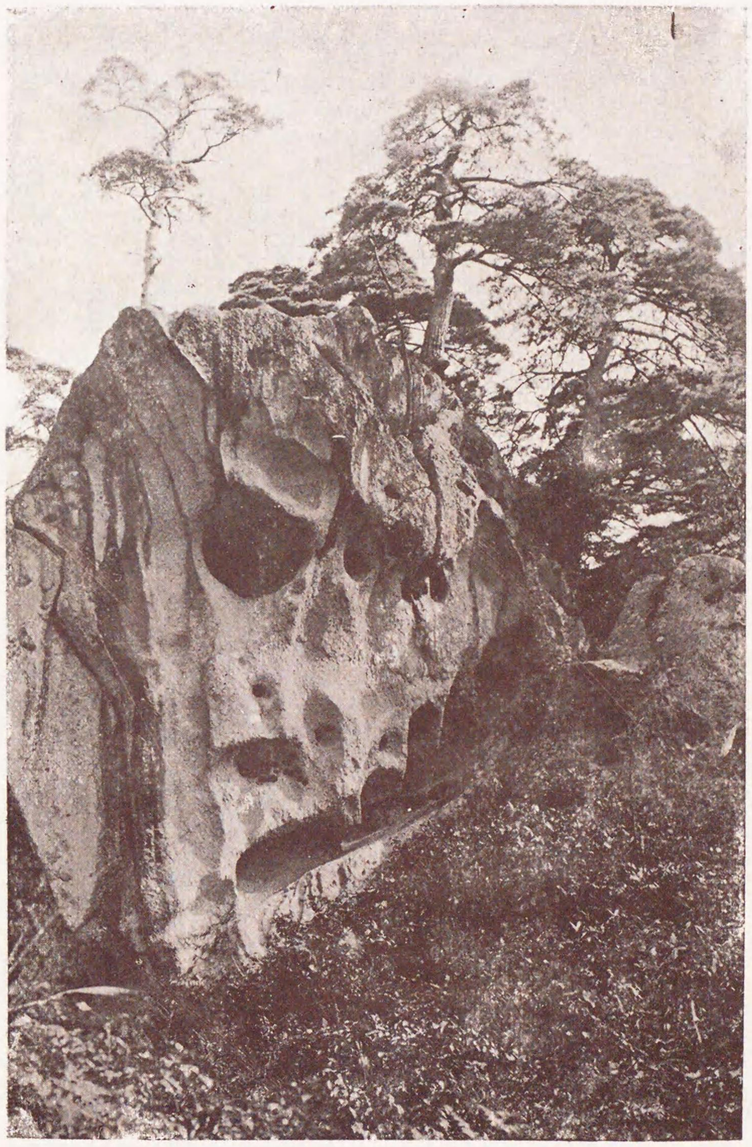


堂中本根

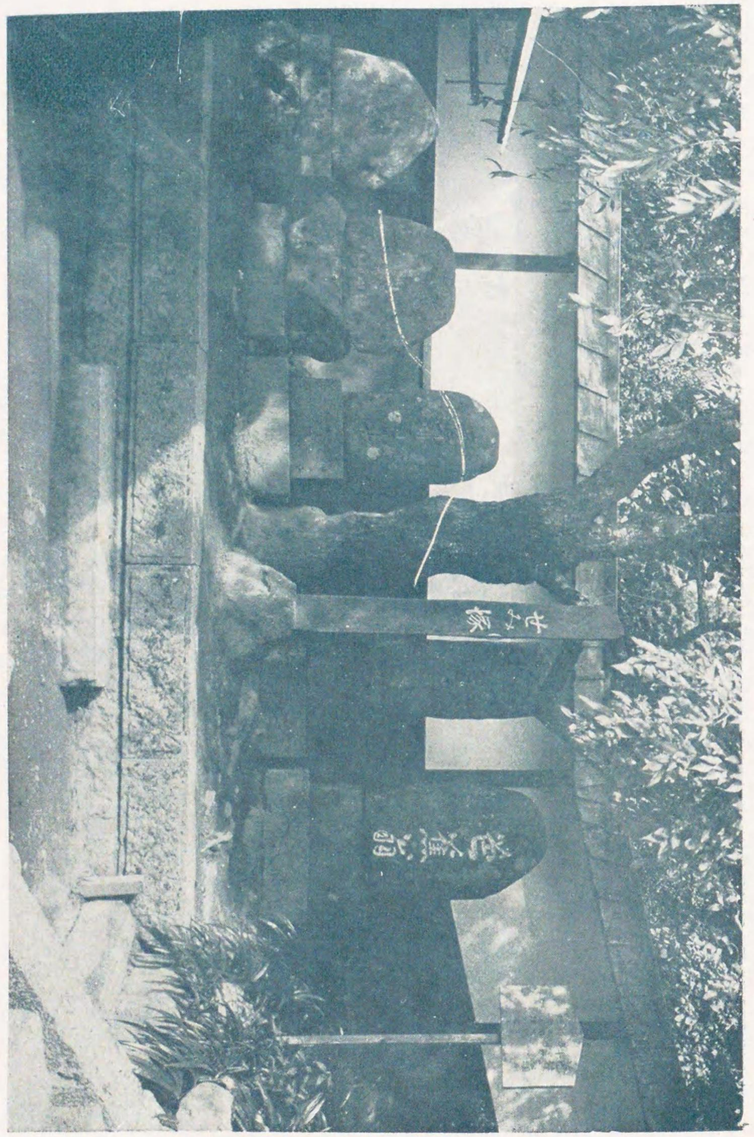
（物造建護保別特）



巖堂迦釋ルタ見リヨ岩姫

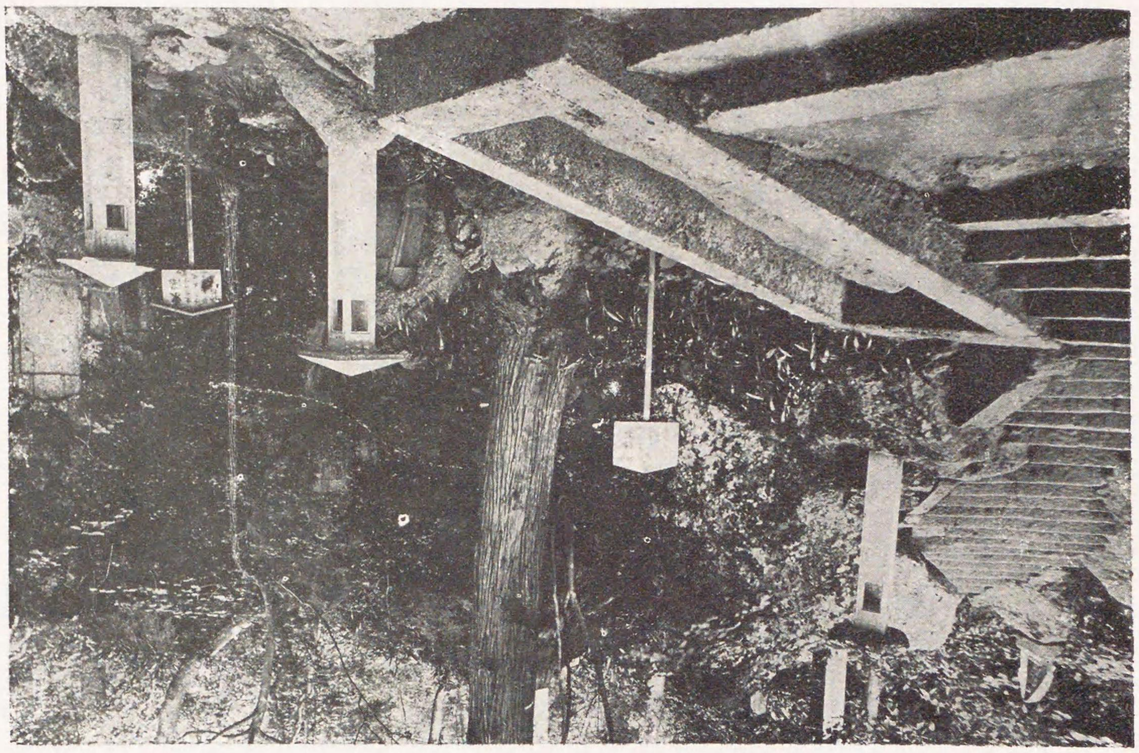


岩　姫

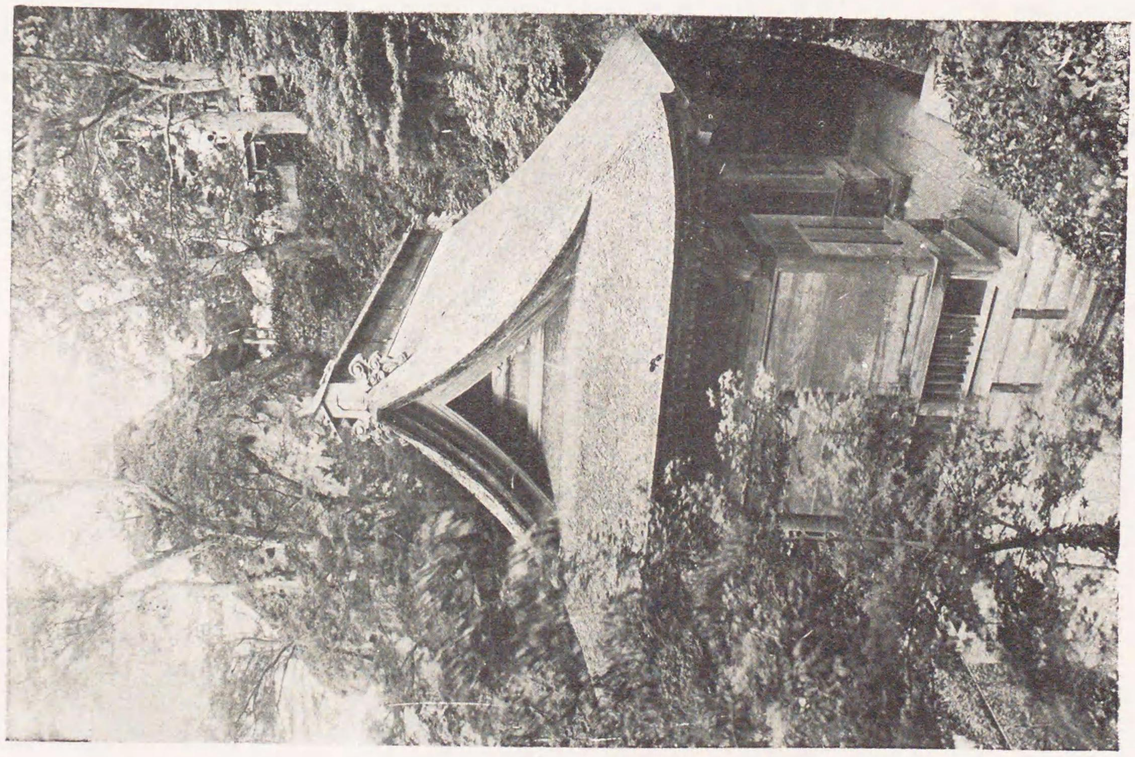


塚　　碑

鐘　　楼



石体御師太山開ト瀧東



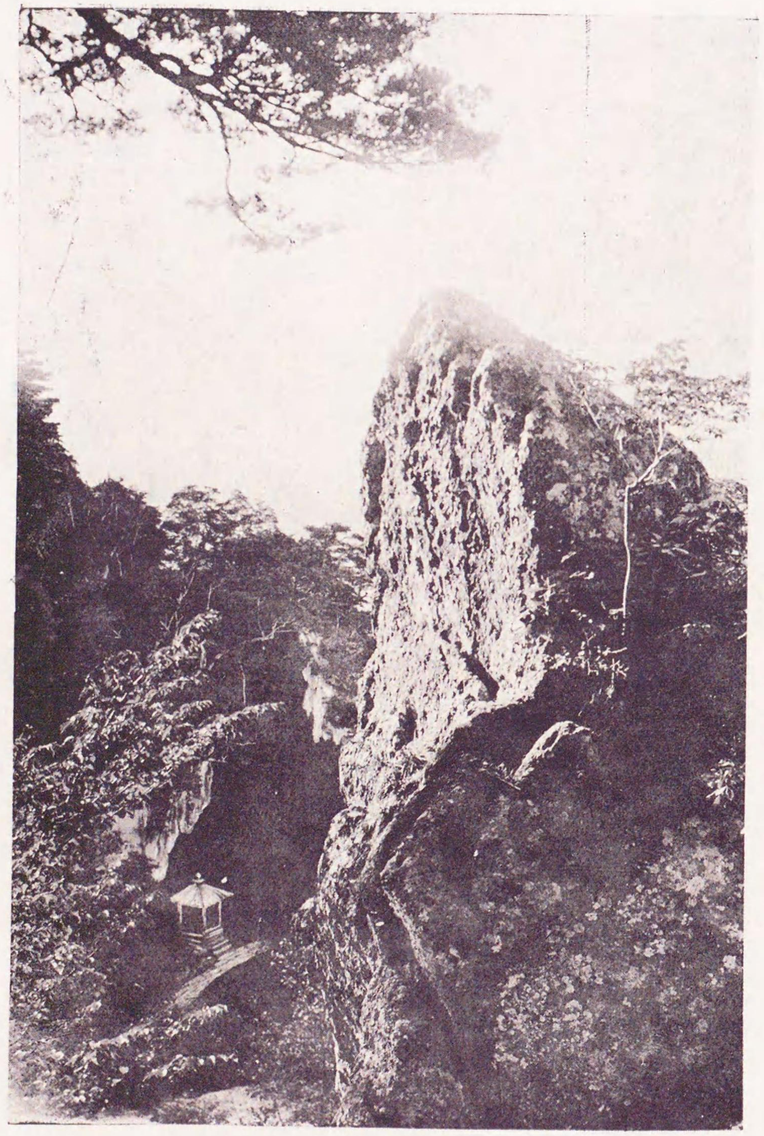
仁王門

釋迦堂巖全景

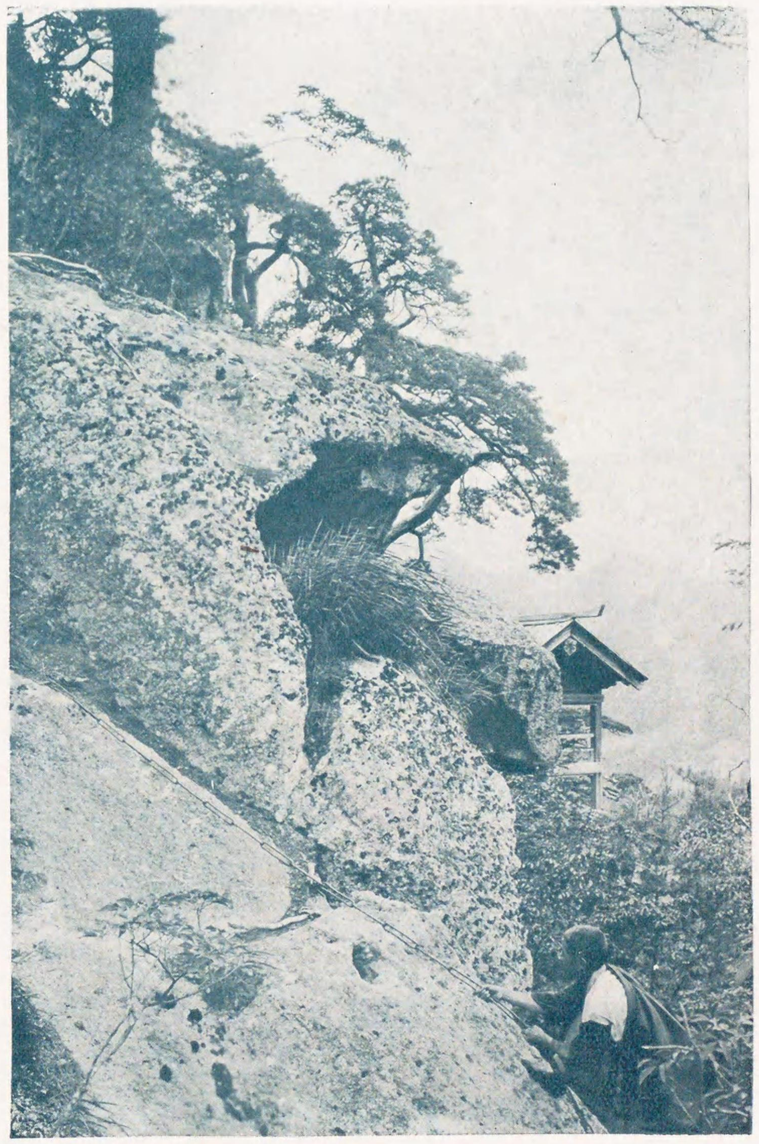
胎內堂

岩　球　寶

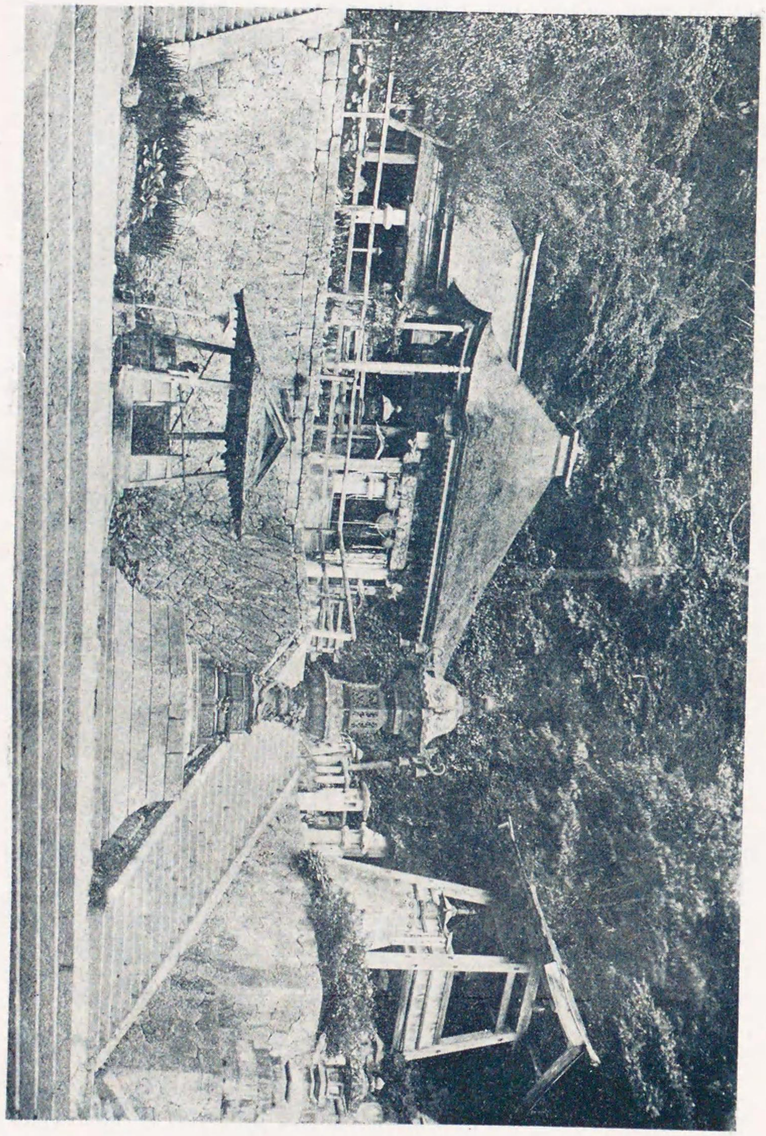
ム望ヲ巖堂迦釋リヨ岩珠寶



釋迦峯ヨリ帝釋天ヲ望ム



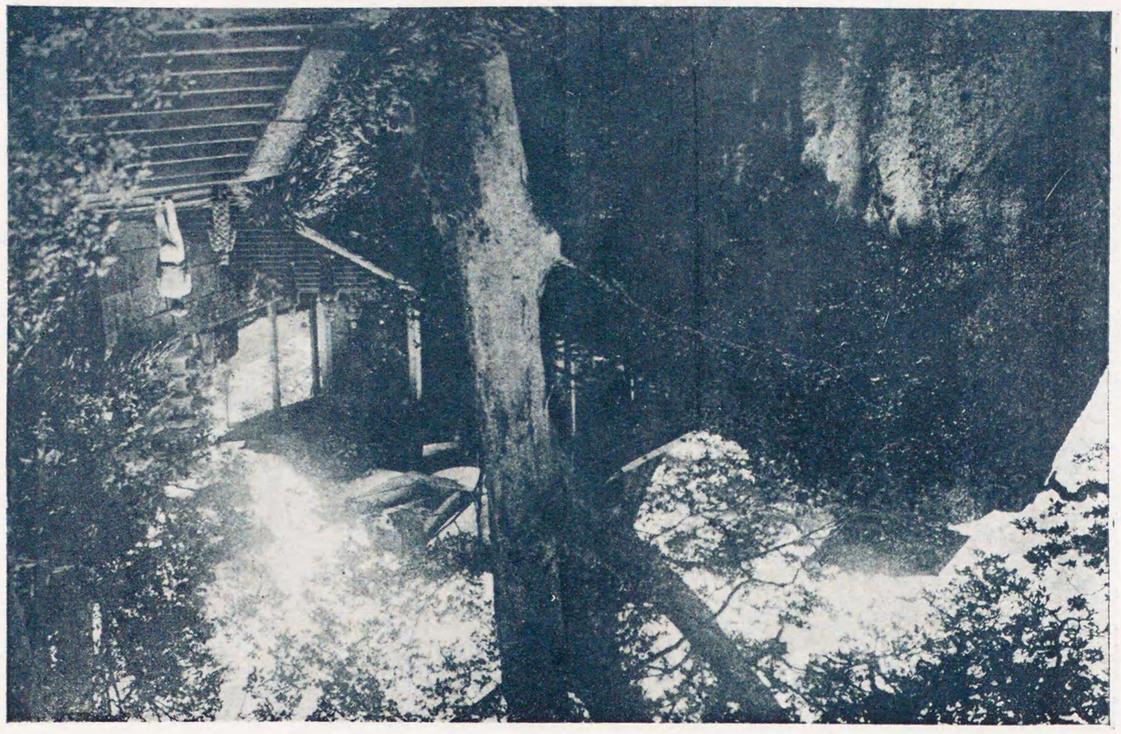
釋迦堂



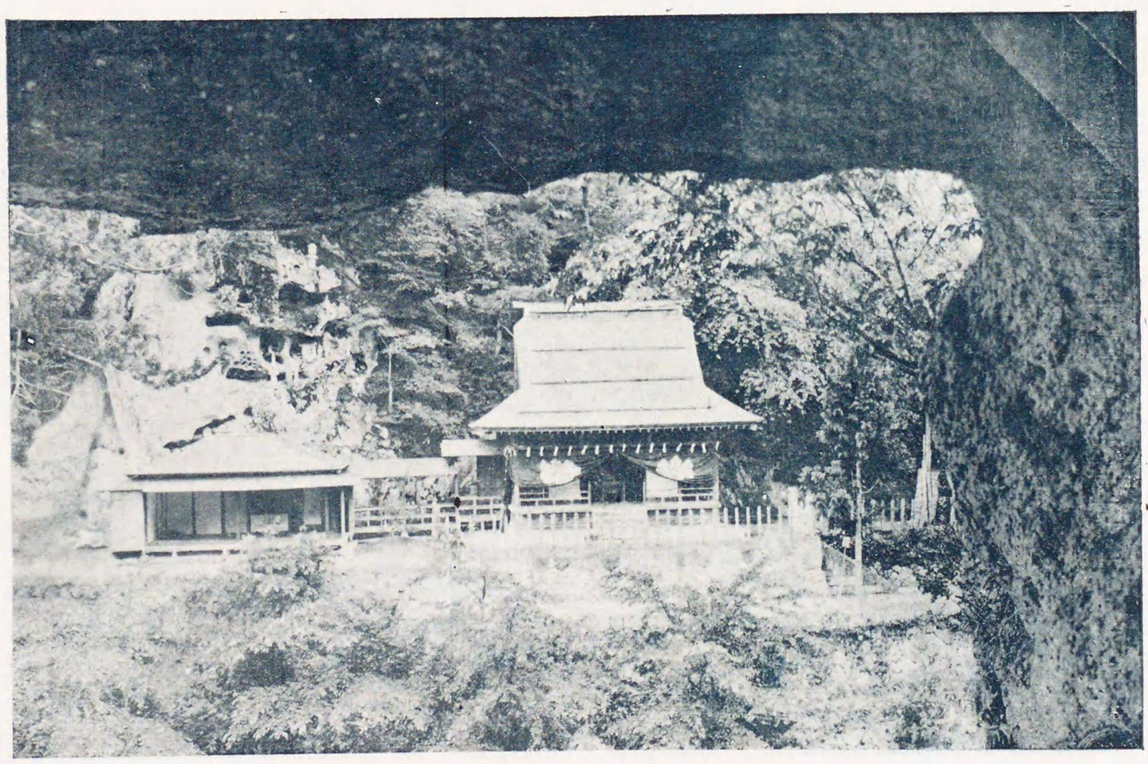
血の池　六觀音　準堤堂

三重塔

ム堂ヲ堂迦釋リヨ院藏華



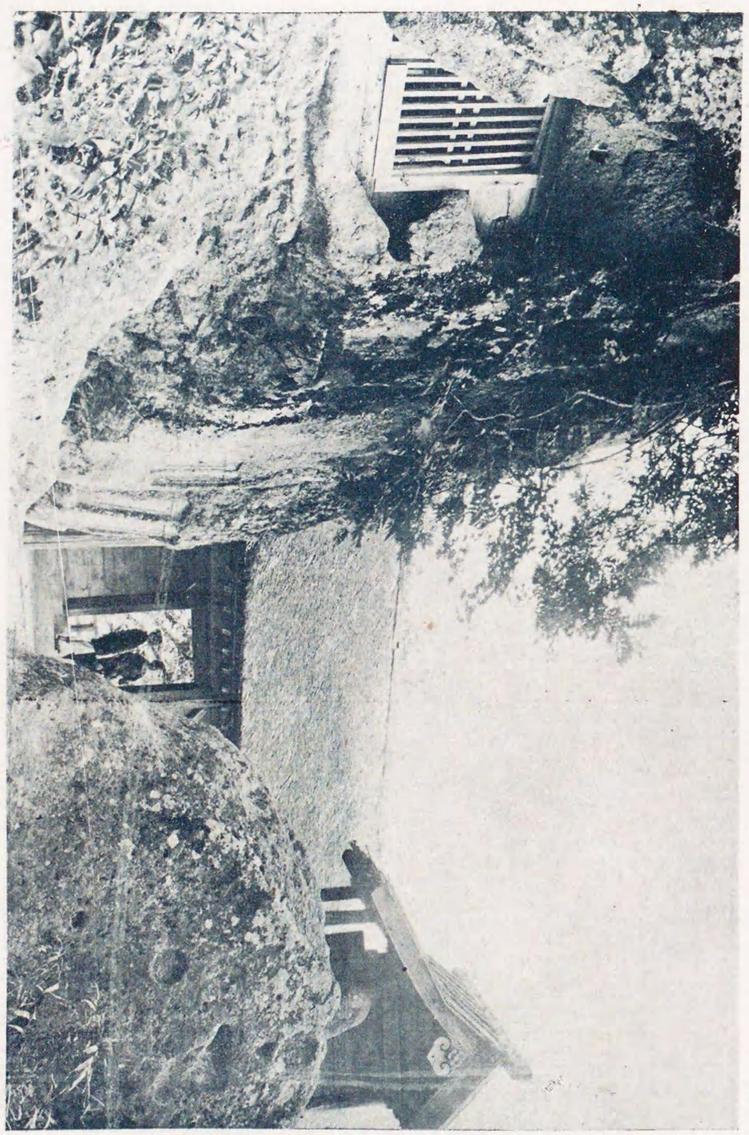
望山閣



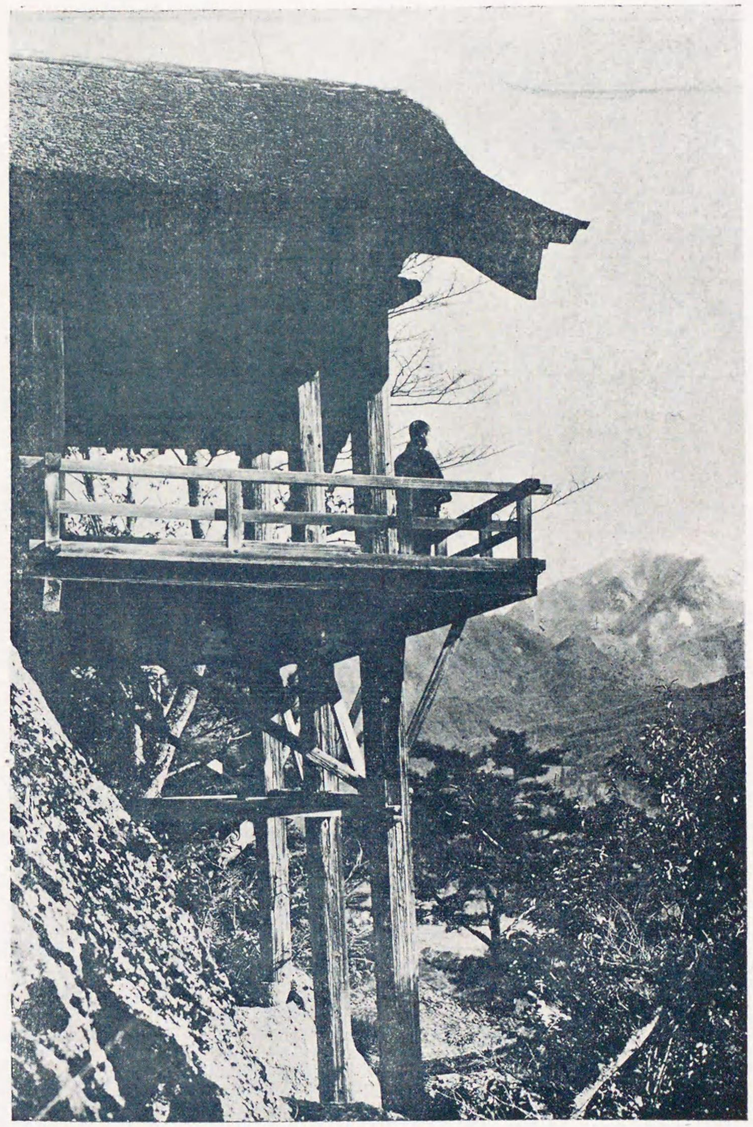
東宮殿下御休息所

慈覺大師入定窟

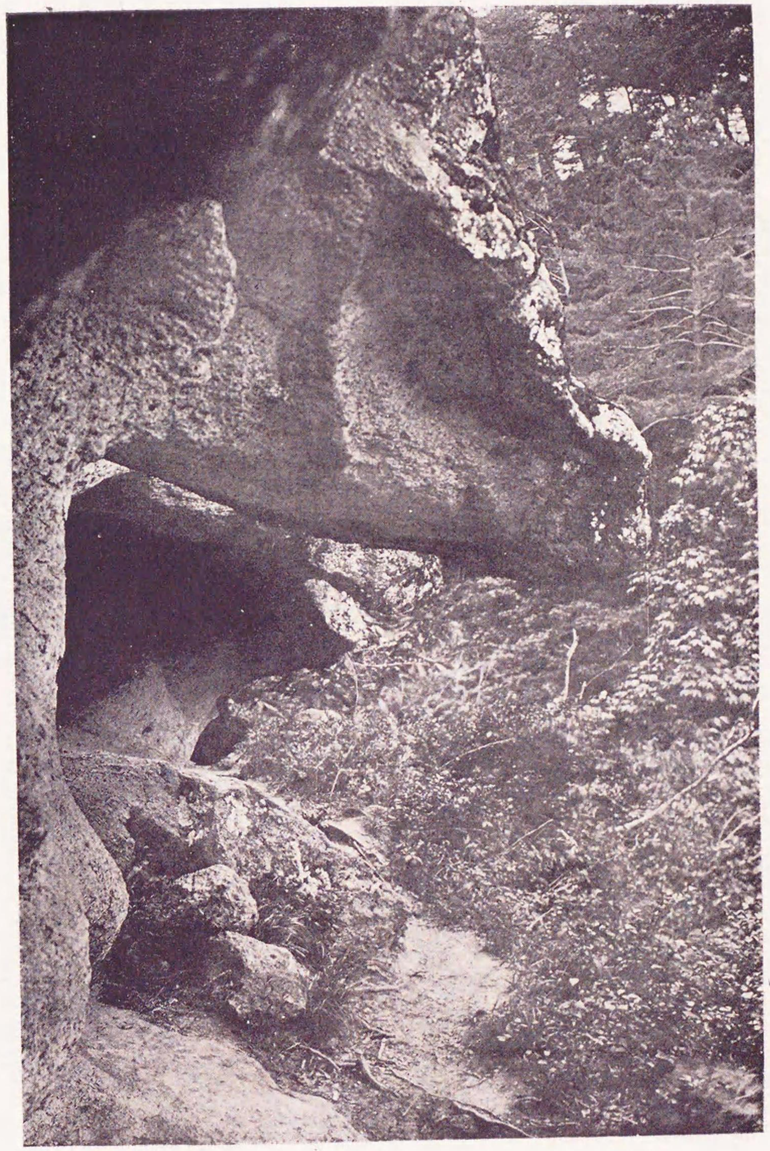
（國　寶）立石寺如法經所ノ碑



詞司弊　堂大五　詞山白



堂　大　五



天花巖途中ノ巖同

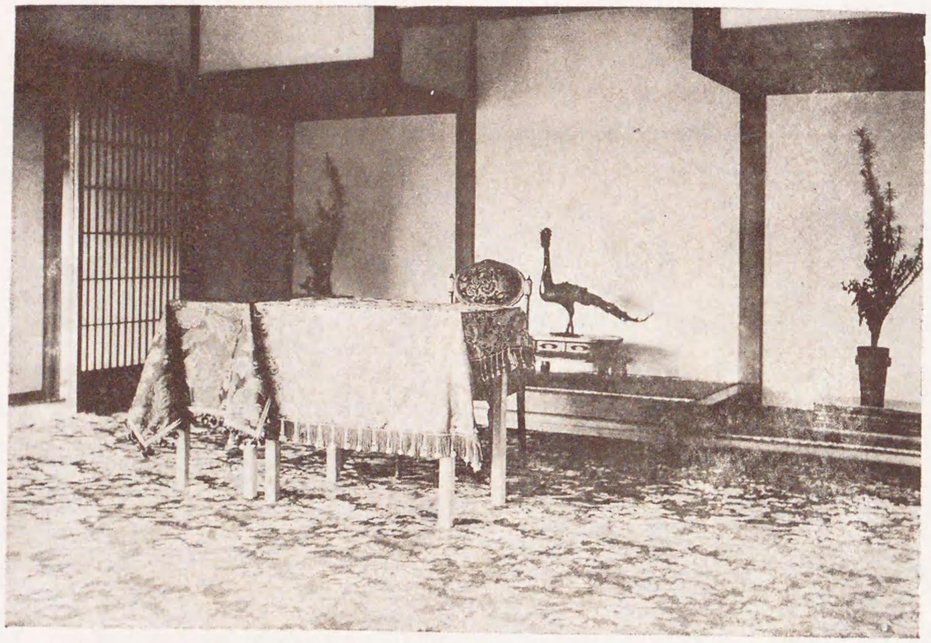
天花巖途中ヨリ巨大ナル巖ヲ望ム

天狗岩頭ノ眺望

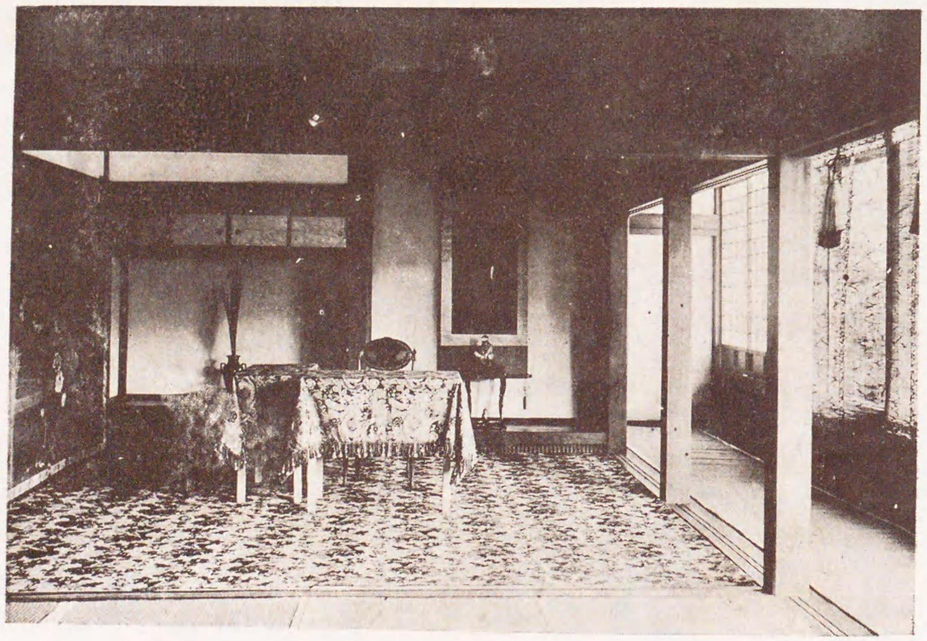
豆岩ヨリ賽河原ヲ望ム

旭觀音

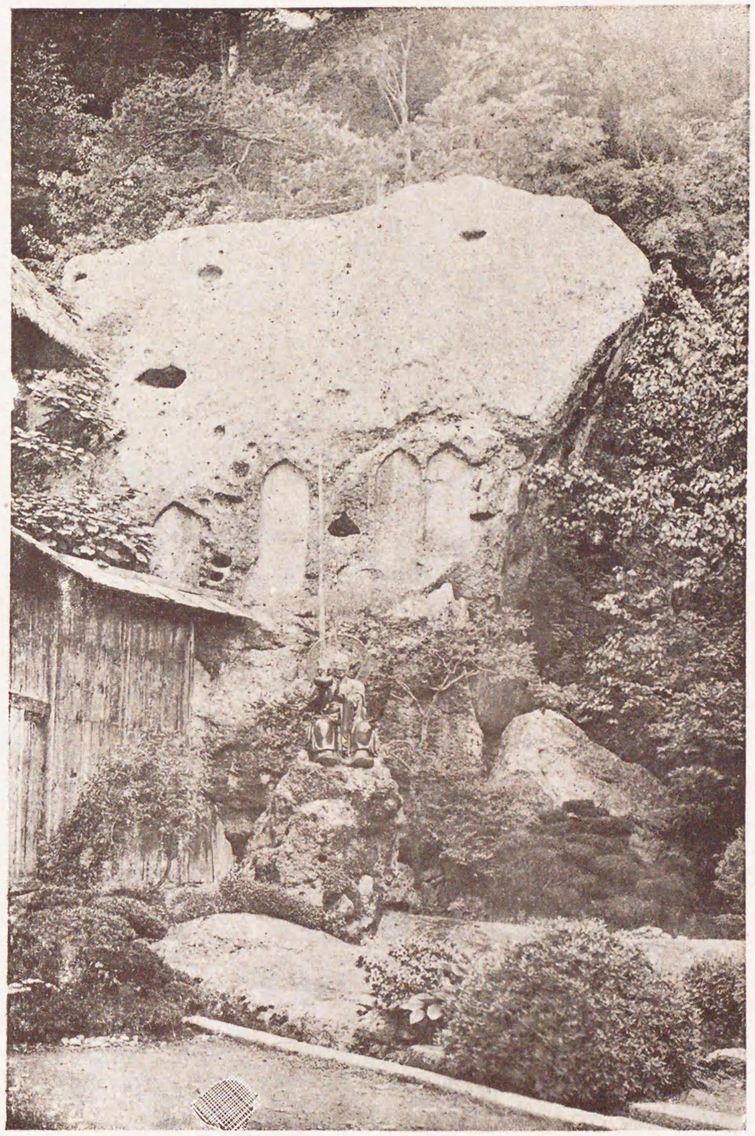
天花巖



山上東宮御休息所



立石寺内東宮御休息所



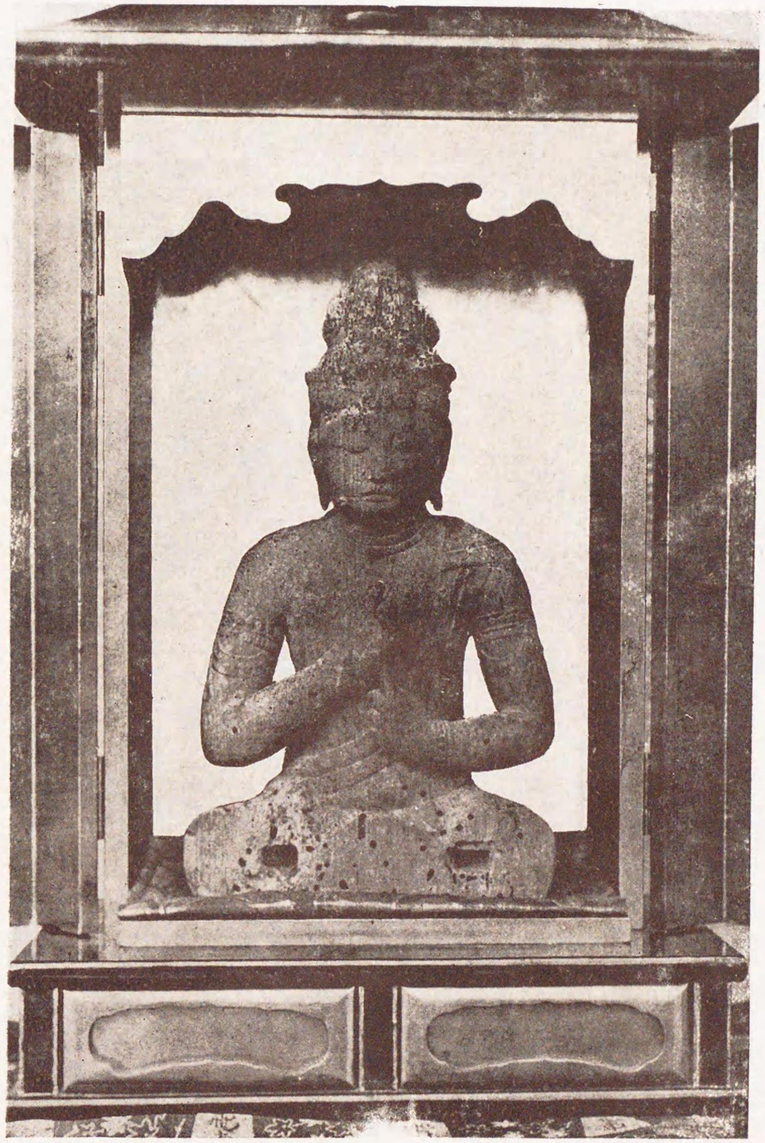
蛙巖ト記念噴水

正觀世音菩薩

毘沙門天

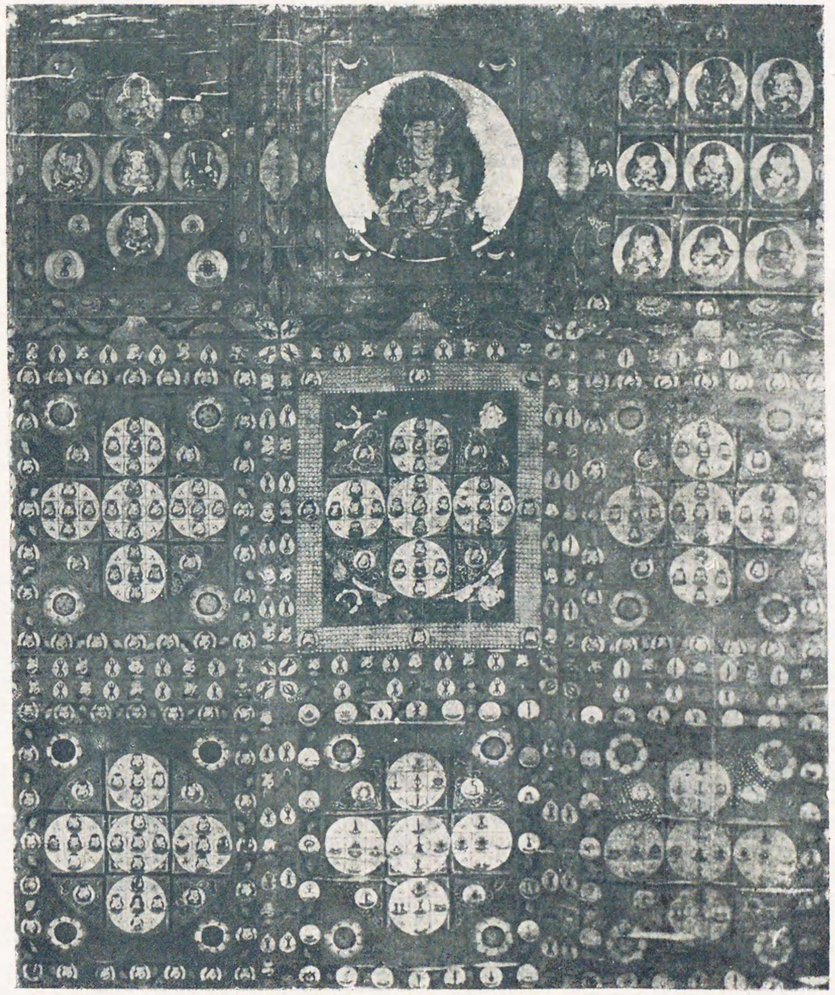
傳教大師像

磐司像



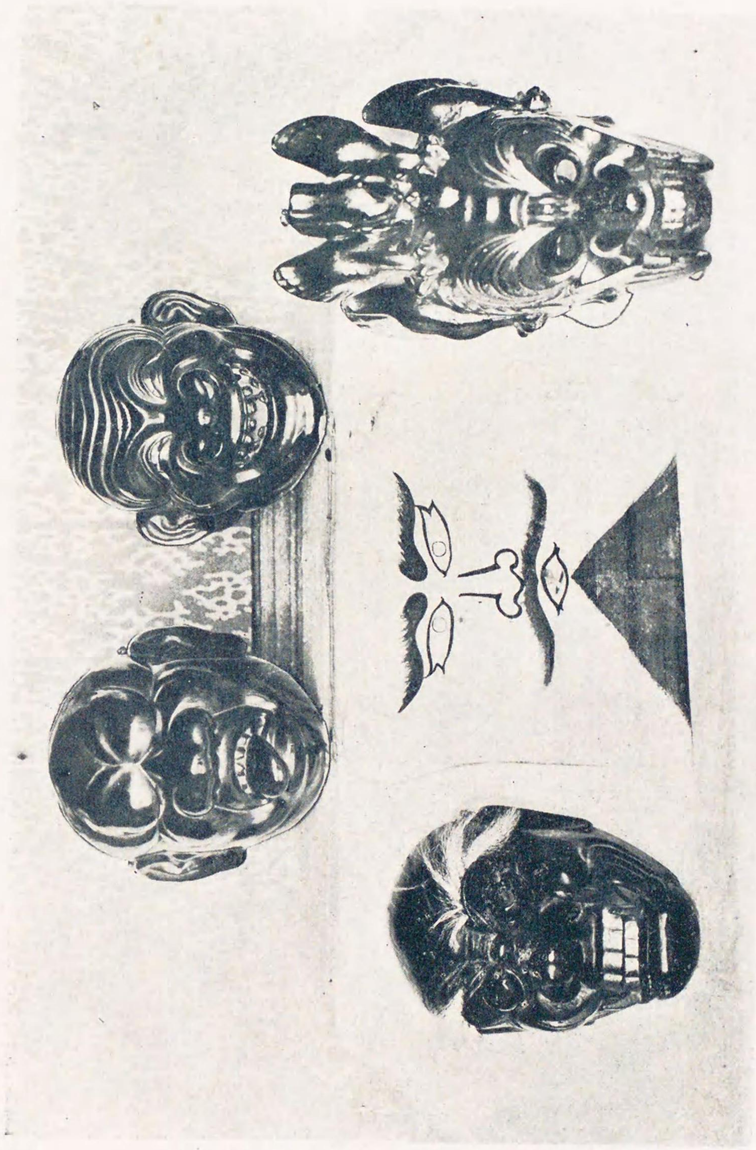
大日如來（弘仁式）

羅陀曼師大教傳



兩界曼陀羅ノ一

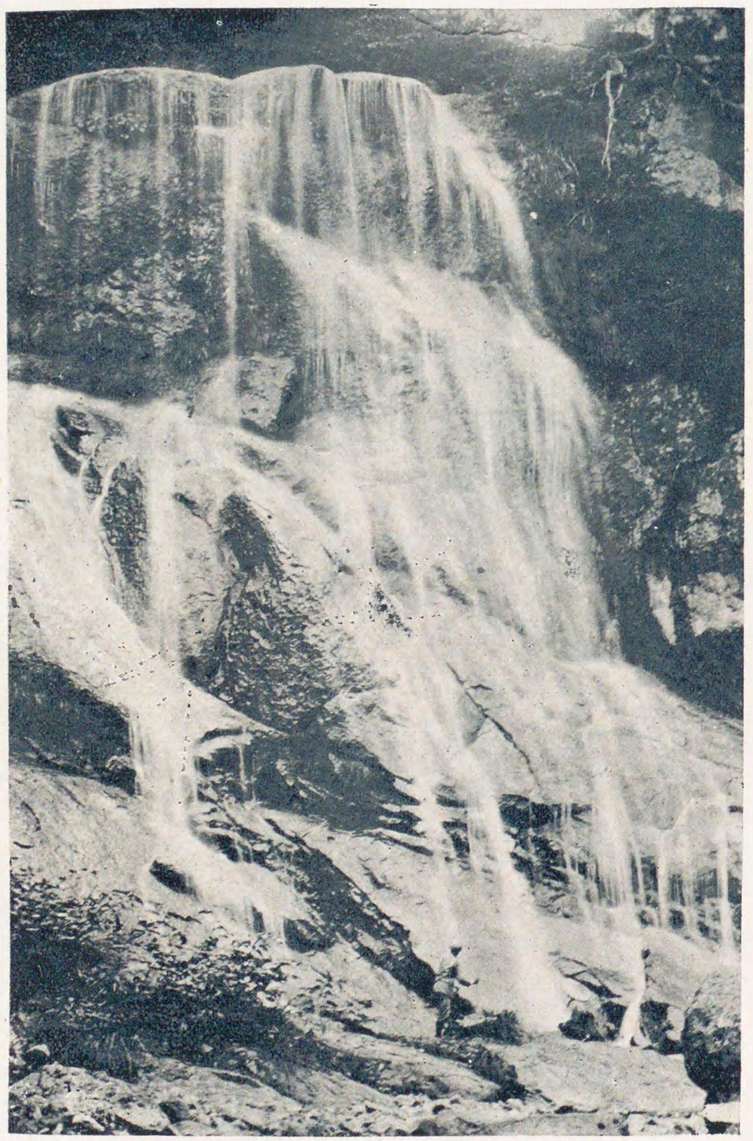
山寺　馬形潜巖



立石寺舞面

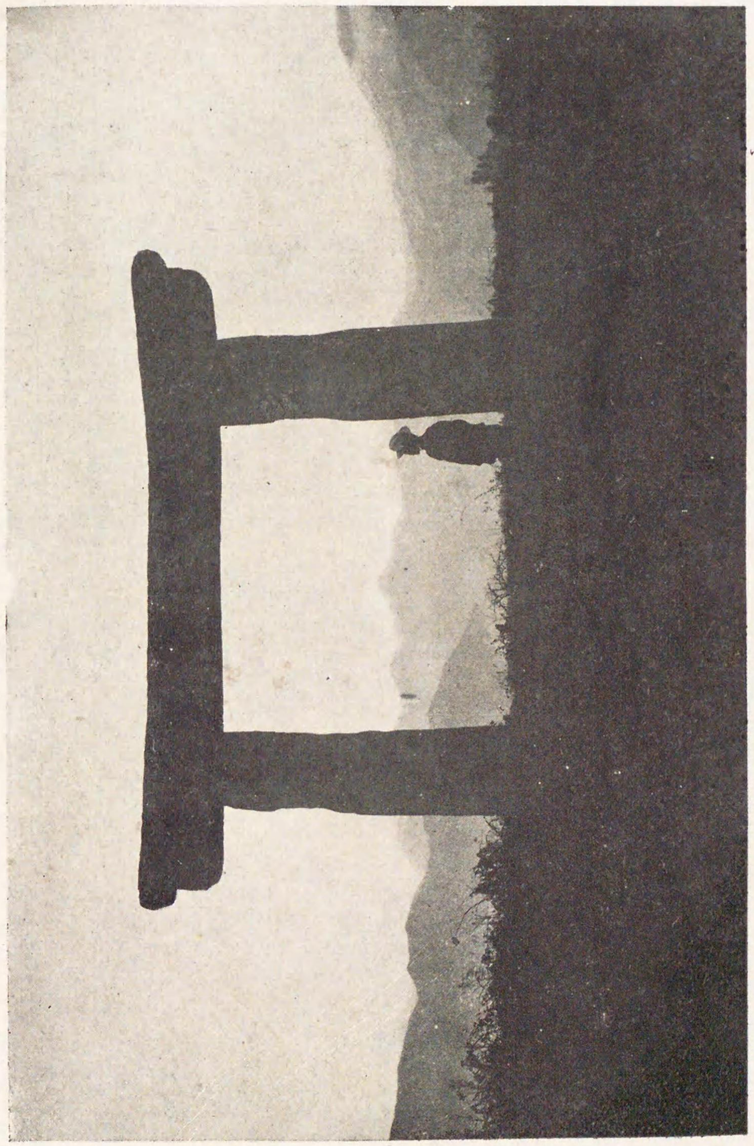
奥ノ寺山　天然石橋

奥ノ寺山　岩塔



白面寺山　藤花瀧

霞瀑



最上三鳥井ノ内立石寺鳥居

山寺名勝志序

古來文士之載筆探名山遊靈地也。唯記其奇觀而不及開創之事蹟。故無益於世者。幾是空文耳。余久厭之。山寺者。關北之名山靈地也。嘗以爲。慈覺大師所經營。必有可觀者矣。將一遊記其功。公私忽忙。未遑理茅鞋。適伊澤榮次君來請山寺名勝志之修正。余讀之。千年名藍之事蹟歷々可徵。其秀靈峻極之奇亦列擧不遺而至大師經營之際。先鑿岩石疏通最上川。變沮洳不毛以爲沃田之記事。則拍掌曰。是余所

期也。果符於所豫想矣。於是欣然執朱筆。聊潤色之。後之遊探者宜觀大師經營之跡以發利民之大志。徒記其奇觀事空文。何取於此書哉。

聞今次
東宮殿下駐玉車於此山。侍臣資本書而說大師之芳躅大師地下之喜可知。乃併足以爲著者之榮矣。因書所感爲弁言。

明治四十一年九月

東京　山下重民撰

緒言

一今回
東宮殿下當山に行啓遊ばさるべしとの報を拜するや、三千の村民齊しく起て山を淨め道を均し、或は記念事業を企てんと謀り謹て其の日の早からんことを祈れり。余も爰に奉迎の記念として山寺名勝志を世に公にせんと欲し、晝夜筆硯に從事し、筐底の草稿を整理して、出版することゝせり。

一從來當地の事を記載せし圖藉には誤謬少からず、是れ正しき資料なきに因るものなるべし。本書は力めて其の正確なるを期したり。又當地には案內記樣のものなきは、探勝家の不便とする所なり。本書は其の不便を補ふに於て少補なしとせず。

一本書は友人高橋正央君が十數年の苦辛に成れる山寺史を骨とし、余が數年間調査したる所を肉として、編纂せるものなり。

一事實の茫漠たるもの、或は考證の不確定なるもの、或は口碑に疑はしきものは、總て之を省きたり。

一書中載する所往々廢毀せる堂宇に及ぶと雖も、然も維新の際のものゝみに限り、其の他は總て除きたり。

一世人は寶珠山を山寺と稱し、名所はこゝに盡くるか如く考ふるもの多しと雖も、少くも三大奇景及ひ瀧の原の大瀑等を探らざる可らず、本書は舊山寺の全部を記載して遺漏なきを期せり。

明治四十一年夏八月淨門庵に於て

伊澤榮次識

目次

○總說 一
位置及區域 一
創立並に沿革 二
○勝迹 二
松原 二
道分地藏尊 二
赤石 二
十二明神 二
聖女宮 二
產橋 二
硯石 二
安養院 二
熊野權現宮 二
三輪稻荷社 二
八王子宮 二
十禪師の宮 二
早尾權現社 二
對面石 三
高橋 三
東宮御野立の碑 三
三王橋 三
王子宮 三
根本中堂 三
清和天皇御寶塔 三

橋殿 三八
姫岩 三九
二の宮、三の宮 三九
日枝神社 三九
阿所川 四二
常行念佛堂 四二
鐘樓 四三
芭蕉翁蟬塚 四三
寶塔 四四
出羽國司鳥井侯の石碑 四五
當山院主の石碑 四六
姥堂 四六
笠投巖 四七
灶香岩 四七
御手掛岩 四七
四寸路 四八
東瀑 四八
御休石 四九
大杉 四九
彌陀洞 四九
東谷靈池 五〇
琵琶石 五〇
仁王門 五〇
龍吻岩 五一
觀明院 五一
護摩壇 五二
性相院 五二
金乘院 五二
胎内堂 五三
釋迦堂 五三
準提堂 五七
中性院 五七
義光靈屋 五八
納骨堂 五九
一切經藏 五九
飛梅 六〇
獨鈷水 六〇
多聖塲 六一
金燈籠 六一
如法堂 六二
三重塔 六五
華藏院 六六
皇太子殿下御休息所 六六
挹翠亭 六七
帝釋天祠 六七
開山祠堂 六八
納經堂 六九
如法經所の碑 七〇
入定巖 七二
五大堂 七三
磐司祠 七四
白山祠 七五

連理椿　七六
賽河原　七六
由利揚觀音　七六
豆石　七六
天花巖　七七
立石寺表門　七八
蛙岩　七八
記念噴水　七八
立石寺　七八
塔石　八一
千本桂　八二
二口峠　八二
磐司巖　八三
名取川　八三
大瀑　八四
七瀑　八六
面白山　八八
石橋　九〇
○附錄　九二
山寺七木　九二
山寺七石　九三
名石　九三
山寺八景　九三
山寺三大奇景　九三
山寺より各地への里程　九四
○詞林　九四

山寺名勝志

◎總說

○位置及區域

奥羽の地由來風景に富む、彼の中央山脈が南北に疾走して東西を劃斷せる中には幾多の勝區あり、其の東に在りては陸前の松島を最とし、西に在りては羽前の松島即ち山寺と爲す共に圓仁慈覺大師の開基にして古來其の名聲天下に嘖々たり。

山寺は山形縣東村山郡の東部山寺村に在り。山形市より仙臺市に通ずる二口越の街道に當る。到る處侵蝕せる第三紀の凝灰岩より成り、古來關北第一の靈窟と稱せられ、山高く水清くして、無數の奇巖怪石は巍然として立谷川に枕みて亂立し、大小四十有八の瀑布懸り、嶂々として夏日の炎熱を一洗す。數十の寺院堂塔は又其間に

在りて、上下數里の壯觀は人をして應接に遑なからしむ。

山寺といへば直ちに奇巖怪石を想はしむるも、其の觀此に止るにあらず。春は花あり。夏は避暑に適し、秋の紅葉、冬の雪何れも宜しからざるは莫し。近來鐵道の開通以來、來り遊ぶもの歳々多きを加ふるは偶然にあらざるなり。

古の山寺領は、東西十餘里南北又數里に亘り、其の域大なり。而して風景として稱すべきは、寶珠山を中心として東西六七里の地とす。現今の山寺村は三面山を繞らし、西方の一面稍開け、東西三里二十一町五十四間、南北一里二十町、段別二千九十餘町有租地、地價金十萬六千餘圓、戸數六百七十一、人口四千六十二を有す。中央の川原町は稍繁華にして旅舍、商店軒を並べ、山形及び天童よりは共に縣道にして平坦なれば車馬頗る便なり。

○創立幷に沿革

山寺は寶珠山阿所川院立石寺と號し、專ら山寺(村人は岩屋)を以て行はる。清和天皇の貞觀二年天台第二祖慈覺大師勅許を蒙り、創建せし所に係る。大師初め東北地方を行化するや、文德天皇の齋衡年間奥州より中央山脈を過き當地に到る。其の巖石の奇秀にして林樹の蓊鬱たるを觀て、以爲らく道場を開き台教を弘宣流布するの好地は此境に若くは無しと、遂に勅許を蒙り再び來りて一大道場を創建せしもの即ち當寺なり。先つ本院を基礎とし、數年ならずして如法堂、五大堂、根本中堂、山王大宮等を經營し了りぬ。大師の此山を開くや、單に深邃の靈窟によりて祕法を修し、以て上天子より下庶民に至るまでの利益幸福を祈る爲めのみにあらず、乃ち當山を以て永宿の地と爲し、布教を勤むる傍ら、大に心を殖産興業に用ゐ、彼の最上川の三難所なる御殿を開鑿し、瀦水を排除して廣大なる耕地を得せしめたり。民大に之を喜び、每年初穗を當山に納め、以て一寺

を建設するに至る。安養院是なり。もと村山即最上の地方は藻が湖と稱し一大湖をなし、西根より東根迄の地は、舟楫を以て相往來したりしといふ。又寺原にては衣服の料として麻布製造の術を教へ。現今干布と稱する村名の存するは、實に當時の記念なり。其の民業に力を注ぐ此の如くなるを以て庶民今尚ほ大師講を修して其の恩に報ゆ。大師は砂金一千兩と寺原にて得たる麻布三千段を朝廷に獻ず。天皇叡感の餘四方三百八十町、即ち東は國境（宮城縣名取郡落合）より西は酢川（南村山郡）を限り、南は兩子塚（南村山郡元木）より北は六道辻（北村山郡六田）に至る寺領を免租地として下賜せられ、併せて現今當山唯一の寶物として保存せらるゝ立石倉印とある鑄璽とを賜れり。

○圓仁

注進

立石寺四至　東限國境　南限兩子塚　西限酢河　北限六道辻

弊免二三百八十町一并是以二沙金千兩麻布三千段一直買取所レ定二寺領一也。

竊以、夫初從二知禮之筭一終至二懸車初年一予年來所レ持二金剛杵一、乍レ兩發レ誓、隨レ投飛轉、定二於永代燈油田一、餘地餘田縱雖二廢壞一金剛杵田敢無二破損一爲レ表二佛法王法誓如一牛角互相守護一令レ久住世一、投二所持兩杵一所二坪定一、或書二千部妙經一安二總持院一、書二千部金光明經一置二文殊樓一、以二石墨草筆一書二如法經一、安二一字精舍一横川如法堂是也、寫二二千部妙法花經一利二上野下野衆生一造二立奥州石藏一號二福遍一切敷羽州三崎巖一稱二根本一建二立松島立石寺號一圓仁處々壞二名字一篇々現二長少一今日於二勝地靈崛一行二五大尊之秘法一於二爐壇一凿二巖一修二百箇日護摩一獨非レ爲レ予、普及二塵類一上自二天子一下至二弊民一平等利益乞也、累代良吏察二此旨一加二被當山佛法一令二久住一現當望、何事不レ滿哉、

是に於て立石寺の基礎全く成り。爲めに幾多の堂塔伽藍を建立せり。降て正嘉中最明寺時賴の來山せし頃は、多少衰微の傾なきにあ

らざりしも、幸に舊に復することを得たりしが、戰亂の世に至りては著く其の影響を受けたり。當時領地に關する古文書あり左の如し。

立石寺院主別當兩職爲譜代相傳所職之上者、管領不レ可レ有二相違一之由、國宣所候也、仍執達如件、

元弘元年十月三日　　前長門守國統

立石寺識乘坊

立石寺院主別當兩職注記金剛杵田等、可レ令二領掌一之由依レ仰下知如レ件、

正慶元年十一月廿四日　　左馬權守在判

立石寺識乘坊　　相模守在判

立石寺院主別當兩職與圓阿闍梨領知不レ可レ有二相違一者天氣如レ此達レ之以レ狀、

建武元年十二月八日　　宮内卿有判

出羽國立石寺院主職幷別當職任二先例一可レ令二領知一之狀如件

建武三年十二月八日　　御判

立石寺識乘坊半竹坊御坊

其後正平十一年八月、最上氏の祖斯波兼頼大崎より山形に移るや、當山は其の鬼門の鎭護に當るを以て深く之に歸依し、厚く保護を加へしを以て、昔時の三千坊と云ふが如き壯觀に至らずと雖も、稍觀るへきに至りぬ、然るに亨祿年中に至り再び廢頽し、常燈勤行皆絶え、十餘年間雨露を凌くべき堂宇なきに至る。當時の院主一相坊圓海大に之を慨嘆し、最上氏に賴り天文十二年四月十三日比叡山に登り其の六月五日開祖傳敎大師支那の天台山より根本中堂に移せし常燈火を受け、同八月二十日歸着し、再び燈火を挑け、翌十三

年四月四日古例により廣圓法印勤行を始むることゝなれり。當時の文書に曰く

出羽國

立石寺

謹案二當寺建立之濫觴一、群徒安全之勝依怙無レ過二此靈崛一、其慈覺大師本願意述之旨、貞觀二年十二月晦日之御記文詳也、誰不レ敬レ之、何可レ疎レ之乎、抑此寺之常燈者、當初被レ移二根本中堂之燈火一訖、尋二彼源一橫三國傳來竪三世不滅之熾盛光也、三火如レ次天地人所レ現、過現當來照曜之慈煙、誠以廣大者哉、爰當二劇亂之便風一、燈炬消盡云云、太以悲歎之至極也、爭無二相續之誘一哉、因レ茲遂二舊貫一、今所レ奉レ移二本山之眞火一也、此是挑二三火一燈一、古來無レ替、自今以後無二退轉一者、先自國安泰而住民增二巨益一、他境歸二悲願一、而貴賤預二利生一而已、

天文十二年癸卯六月五日

執行權大僧都法印大和尚位永賢印

座主二品親王大和尚位

尊鎭印

如法堂大師御建立以來勤行不斷之處、天童成生不義以發向、當寺悉令二破滅一、寺中家無一十餘年其間堂社破、已後漸雖レ令二歸山一、如法堂灯明、本山根本中堂之灯火大師此寺被二移置一之間、遠路難澁之處不レ及二取寄一過行、及二二十年勤行無レ之、爰沙門一相坊圓海、宿緣多厚之故山形義守御母奉レ賴二大檀那一、天文十二年癸卯月十三令二歩行一無レ難登山、東塔佛頂院鷲王院令二宿坊一、被二中堂之灯火申受一、北國之於二海中一數度舟中雖レ相二難風一無二相違一下着、同年八月廿五、同年十三年甲辰、從二彌生上旬一古例之任二法則一勤行執二行之一時大聖院主廣圓阿舍梨相始也、功德莫大也、大檀那現世安隱、後世善生之願文、誠以不レ可二頓殘一也、仍當山緣起古本、灯明分時之狀爲二末代一奉二納內陣一者也、願依二此功德三界萬靈、有緣無緣、大師之預二引接一、殊爲二春還芳公禪定尼大菩提一也、

一相坊圓海生年廿七花押

爲二末代亀鏡一緣起文雖レ書二載之一、正古本寫留、舊本者相副寺家江下之、

處也、

寺家靈寶重寶不レ過レ之、不レ可レ被レ處二聊爾一者哉月藏房法印祐增案清

共書之、

其後元亀二年比叡山の堂塔伽藍は、織田信長の爲に悉く灰燼となる。時の探題豪盛僧正、勅命幷に豊臣秀吉公の教書により、天正十三年二月八日延暦寺中堂を再建せり。

御綸旨に曰く。

比叡山根本中堂戒壇院事再造之儀、諸壇之助力尊卑奉加、及二此時一抽二懇情一、致二復營之誠一者、可レ爲二神妙一之由天氣所候也、仍執達如レ件、

天正十二年七月十日左中將判

正覺院法印御坊

秀吉公の教書に曰く

比叡山根本中堂戒壇院事、豪盛法印全宗爲二本願一可レ致二再興一於二坊舍一者、速可レ爲二志次第一、寔山門之儀者于レ他異、爲二王城之鬼門一守二天下安全一之靈地一云云、秀吉都鄙靜謐、依レ思二國家鎭護一、欲レ起二荒廢一者也、仍狀如レ件、

天正十二年五月朔日

筑前守秀吉判

正覺院法印御房

德雲軒

同十七年十月二十五日、當山如法堂の燈火を比叡山に分移して常燈とせり、採願の文に曰く。

凡厥温レ古知レ新君臣尊崇、繼レ絶興レ廢貴賤稱レ譽矣、往昔慈覺大師所持之金剛杵、投二虛空一彼在レ地定二燈田一、此砌建二伽藍一發レ誓、造立所精舍、羽州松島號二立石寺一、金剛杵田干レ今爲二寺領一云云、熟顧二地景一、後巖崛嶮々兮、圓仁入定處、花芳峯不レ異、前溪川深々兮、大宮御在所波止土濃相似、

根本中堂法華常行、山王七社常燈三火、全移二比叡山一、然而不慮逆風消二燈明一、于レ時當寺僧圓海憂レ之去天文十二年林鐘五日、高祖傳教所レ挑中堂常燈、移二天地人所現三炬於立石寺一、其後元亀二載仲秋十二日、不レ圖兵旗靉レ雲、逆火輝麓、延暦寺堂塔半日灰燼、爰豪盛偶逃二戰場之變災一黷二顯密之職位一肆且恐二皇祈之怠慢一、且慨二學業之廢亡一因レ茲再建之微志奏二聞禁裡一、請二綸旨一、天正十三曆餘月八日、造二立中堂一、欲レ挑二晝夜之燈光一、招二元明火於立石寺處一、天正十七歳初冬廿五日、圓海所レ移三燈運送一、爲二中堂常燈一、本末雖レ異、不思議一也、今昔以二別火一火無レ二、俗諦常住目前鎭護國家指レ掌、然則出羽守義光預二醫王善逝之感應一、彌增二嘉運一。一相坊圓海蒙二山王權現之冥助一、倍滿二善願一、兼又寺院繁隆、民屋安穩而已、

十一月　日

執行法印探題僧正本願大和尚位豪盛印

最上家は、祖先斯波兼頼以來代々當山を尊崇す。

謹言上

義光於二本懷一者、立石寺於二一山中一他宗住居之儀不レ可レ有レ之候、其上諸篇威徳院殊我々以二談合一可二相調一之旨不レ可レ有二相違一候依如レ件、

義光華押

立石寺

永祿十三かのへむま年正月吉日

立石寺常燈斷絶之間、今度爲二油田一、重澄之郷之内に畑仁貫八百五十地、於二末代一令二寄附一候、衆中無二如在一可レ被レ挑二法灯一事詮要候、仍爲二後日一之狀如レ件、

高楡小僧丸

義光墨印

天正十四年丙戌正月一日

立石寺

衆徒中

最上氏の時代本寺の領地左の如し。

二千四百三十八石　立石寺

内

千石　修復料諸祭料として奉行本間作右衛門所持

千四百三十八石學頭並一山衆徒五十坊神人宮人配分

此外末寺分左の如し。

三百石　立石寺末若松寺別當衆從十二坊

十二石　立石寺末觀音別當

百石　立石寺末東漸寺

二十石　立石寺末千手別當

最上氏は其の祖先より深く當山に歸依し、義光に至りては特に家臣神保隱岐本間作右衛門等を當山奉行とするに至れり

其の後東叡山天海大僧正（慈眼大師）は痛く當山の壞敗を憂ひ、遙に書を

最上氏に寄せ再興を屬せらる。其の書に曰く、

一書令二啓達一候、其以來者久々絶二音問一候□□事、去年於二尾州一相煩、此頃本復仕下着申候、日光山御祭禮に付き罷越し候、然而最上山寺之庵室跡之儀、觀音院内意に付、中性坊申付候、彌寺相續仕候樣可レ被二仰付一候、彼寺之儀貴公御先祖之遺所候付別而被レ入二御念一成立候樣指圖任置候、猶觀音院可レ有二演說一候、恐惶謹言

卯月十日　最上源五郎殿　大僧正天海花押

最上家は祖先斯波兼頼以來代々當山を尊崇す。

最上氏改易の後、山形城主鳥井忠政と領地を爭ひしが、圓海少しも屈せず、終に彼をして謝罪せしむるに至りしを以て、幸に其難を免るることを得たり。寛永元年德川幕府東叡山を開創し、中堂を建立して高祖傳教大師自作の藥師如來を近江の石津より移し、日光月光十二神將は當山中堂に安置せる開山大師の作を移し、當寺には

幕府より新に刻せし者に、中堂修繕料として金百貳拾兩を添へて之を贈らる。寺領は其の後慶安元年七月十七日附を以て三代將軍改めて千四百二十石の朱印地を賜ふ。其の書に曰く、

當寺慈覺大師金剛杵田領、出羽國村山郡成生庄高籏村内八百石、山寺村内五百石、金井庄青柳村内百廿石、都合千四石廿石事、任二先規一令レ寄二附之一訖、全可二收納一、諸堂役領學頭領衆徒領此外諸配當如二有來一可二沙汰一、幷境内山林竹木諸役等免除之旨、長日護摩供常燈無二退轉一、專佛事勤行可レ抽二天下安泰懇祈一之狀如レ件、

慶安元年七月十七日　　征夷大將軍德川家光

御朱印

當時の配當は左の如し。

三百石　學頭領

百石　山王權現三季祭禮料

百廿石　天下泰平長日護摩供料

百四十石五斗五升　諸堂供料

百六石一斗六升　常行念佛堂料

十七石　華藏院

二十石一斗三升　寶幢院

二十三石五升　善行院

二十七石三升　圓乘院

十七石九升　觀明院

十八石　澤之院

二十石六升　鷲峰院

十四石　眞珠坊

三十石　密藏坊

十九石五升　大門坊

二十石　竜城坊

十五石　東泉坊

六十四石二斗九升　修理料

三十九石二斗七升　中性院

十四石七升　不動院

十八石　極樂院

二十七石　松藏坊

二十四石三升　中之院

二十九石七升　金乘院

十七石二升　蓮城院

十一石六升　定光坊

五石　在林坊

十二石　福壽坊

十石　別當

六石二升　榮藏坊

十二石　銀藏坊
二十石三升　圓藏坊
十七石　乘蓮坊
九石一升　宮之坊
十二石　吉祥坊
十石四升　實境坊
三石一升　神子本木
二十四石二升　承知告昌
十一石一升　同宮仕
五石八升　同無量
十五石　大工新助

殘高修理用意の料に充つ。

慶安二年院主尊陽江戸に參著し、二月朔日登城して年頭を賀し、其

十石　清香坊
三石一升　寶淨坊
十四石七升　息障坊
十四石七升　敎林坊
十八石二升　惣持院
三石一升　神子宮脇
二石　神子一木
五石二升　承知幸德
三石　同常樂
五石七升　同常力
一石四升　河內

の後七年毎に院主年賀に登るを例とす。爾來種々の事情と轉住の弊に因りて諸堂宇大に破頽せしを、亨保年中貫主楞伽院寬雄大僧都は、江戸に上り。幾多の寄附金を得、山王の宮を首め、其の他を改建再築せり。又先々住たりし偏明院情田は、私財一千八百餘兩を以て磴道及び諸堂宇を改築修繕し、大に面目を一新し、且つ時の管領の宮に金一千兩を献し。寺を法脈相續と爲す等、大に力を盡し以て明治維新に及び、大僧正壬生優田代となり。同三年二月二十日領地は上地となり、境內も割て上地すべきの命を受け、境內は五萬八千六百四十七坪となりぬ。此の時又神佛を分離し僧徒の神勤停止となる。因て山王權現は村社日枝神社となり、佛像を中堂に移せり。同二十三年七月宮內省より中堂保存料として金貳百五拾圓を下賜せられ、以て現住職壬生芳田に至る。同四十年十九萬餘坪を境內に編入することを允され、全境內は約二十五萬八千坪となる。同四十一

年根本中堂は特別保護建造物となる。大正四年三月立石寺如法經所の碑は國寶に指定せらる。大師創立より法燈の輝くこと實に六十七世一千四十餘年とす。嗚呼是の閑寂の靈山幽靜の仙水、天下の名勝として以て誇るに足るべし。

左に立石寺別當職の歷代を列擧せん。

開山	慈覺大師	二世	安然和尚	三世	鏗信上人
四世	圓淳和尚	五世	圓實和尚	六世	宗源法印
七世	快秀法印	八世	圓眞法印	九世	圓胤法印
一〇世	聖承僧都	一一世	良照上人	一二世	仁海法印
一三世	良海法印	一四世	明尋法印	一五世	慧澄阿闍梨
一六世	豪榮和尚	一七世	義海法印	一八世	慈空法印
一九世	澄雄和尚	二〇世	盛秀和尚	二一世	全舜法印

二二世	實海行人	二三世	性覺和尚	二四世	行海和尚
二五世	良林和尚	二六世	道燈和尚	二七世	興圓阿闍梨
二八世	圓秀和尚	二九世	有見和尚	三〇世	忠圓和尚
三一世	興秀和尚	三二世	尊秀和尚	三三世	興了法印
三四世	澄源法印	三五世	良鎭大阿闍梨	三六世	實雄法印
三七世	良雄法印	三八世	圓海法印	三九世	廣圓阿闍梨
四〇世	亮雄法印	四一世	了雄法印	四二世	尊陽法印
四三世	實俊法印	四四世	公憲法印	四五世	秀海法印
四六世	英海和尚	四七世	公淵法印	四八世	貫通法印
四九世	惠叔法印	五〇世	惠海法印	五一世	公辨法親王
五二世	公寬法親王	五三世	寬雄和尚	五四世	亮雄和尚
五五世	慧含和尚	五六世	宣雄和尚	五七世	鑑古和尚
五八世	慈順和尚	五九世	慈延和尚	六〇世	慈門和尚

六一世　慈湧和尚　六二世　貞尊和尚
六四世　慈舜和尚　六五世　情田和尚
六七世　芳田和尚　六六世　優田和尚

寶珠山立石寺は此の如きの由緒あるを以て曩に　小松宮、閑院宮殿下の御成あり。明治四十一年九月には　今上天皇陛下未だ東宮にましゝ時行啓を辱ふす。最近大正十年八月秩父宮、高松宮兩皇子殿下の御成りあり、同十三年十月梨本宮殿下の御成りあり、當地の面目何事か旃に加へん、是れ四千の村民齊しく歡喜する所なり。

◎勝跡

○松原

山寺の入口なる茫々たる原野を松原と曰ふ、往古は之を寺原と稱したり。清和天皇の貞觀年中開山慈覺大師麻布三千段を朝廷に獻せしが、其の料は此寺原に栽培せしめたるものにて、當時大師が未た開拓せさる地方をして先つ拓殖の業に就かしめたるものなり。現今此の松原の一部に千布と稱する村あるは、此の故事に據りて名けしものなり。昔立石寺に參詣するには現今の高籏村大字清池より此の原の中央を經過したるを以て茲に一基石製の鳥居を存せり、後世に至り山形及ひ天童の繁華となるに隨ひ、道路變じて桑田となり、遂に現今の通路を開くに至り、此の鳥居は北村山郡東根町六田にあるもの、幷に南村山郡瀧山村元木にあるものと共に最上三鳥居の一として其の遺跡を存するのみ、實に寶珠山立石寺の舊門戸たりしものにして、頗る古雅の風に富めり。此鳥居の東十町許、字上荒谷に觀音堂あり、靈驗著しきを以て參詣する者多し。本尊は子安觀音(木像二寸五分)にして、慈覺大師の作なり。又阿彌陀如來

（木像一尺三分）と正觀音（石像一尺五分）をも安置しあり、阿彌陀如來の尊像は或は聖德太子の作なりといへり。

○道分地藏尊

寺原の極れる處天童と山形よりの道路相合して一となる。こゝは元の山寺村の西端にして、字を地藏堂と曰ふ。昔は從來是刹生禁斷と書せし木標を建てたりし所なり。こゝに慈覺大師自刻の地藏菩薩を安置せる堂宇あり、最上四十八地藏尊の第三番なり、本堂に古額を存す、數百年來風雨に晒され、爲に繪の部分のみ高く現れ、傍に文治四年七月十日の文字幽かに見ゆ、堂宇は明治四年火災にかゝりし、其の壯麗昔に及はずと雖も、獨此繪馬の存するは幸と謂ふべし。

○赤石

地藏尊堂の南立谷川の下流なる河岸に在り、山寺名石の一として其の名を知らる、此石あるに因り該地方一帶を總て赤石と唱ふ。

○十二明神祠

道分地藏尊堂の東數丁山腹高燥の地に在り、昔槻の大木ありて山寺七木の一なりしと云ふ、今猶ほ樹木蓊鬱たり、山寺十二明神の一にして、保食（ウケモチ）の神を祀る。

○聖女宮

地藏堂の東北なる大石澤に在り、距離約十町許にて磴道に就き、級を拾ふこと三十三にして、南面の小社を得、是ぞ聖女宮にして、世に子安觀音といひ、本地如意輪觀音なり、此の佛を信すれば難產の患なしとて、來り詣するもの少からず、川東三十三觀音札所の一たり。境内に樅の大木あり、又社の傍に清泉湧出す、大石澤は維新前までは樹木蓊鬱として碧空を蔽ひ、子々岩、鳴聲岩、障子岩、納戸が島、子安觀音ゴロビツ岩等。前後數十磊々として突兀し、清流其の間を繞り、澗谷頗る幽邃なりしが、明治維新の際立石寺境内分割上地せられ

しより、名石は悉く建築用として破壊せられ、全く其の舊觀を失ふに至りしは實に惜むべし。

○産橋

産橋は字地藏堂と宮崎の間に在り、大石澤の溪流なる産水川に架したる圯橋の稱なり。村人は之を「ウメ橋」と呼ぶ。橋上より南山の峯を望めば、綠樹青草の裡一大巨巖の横るを見る、是ぞ箱岩にして、宛も四箇の箱を積重ねたるが如し、山寺名石の一なり。

○硯石

寶珠山麓に突兀たるものにして、岩上凹所の形に因りて硯岩と命名せるものなり、奥の院如法堂にて比叡山横川の法式に倣ひ毎日七行半つゝ法華經を書寫するに、石墨草筆を用る、其の硯水は此の岩上の天水を用るを例とす、山寺七石の一として廣く世に知らる。

○安養院

硯岩の西なる山寺小學校々地は、解大山安養院といふ律院の跡にして、昔時は十一面觀音を安置し、靈驗著しく大に國人の敬信を受けしものなりと云ふ。明治三十六年秋までは纍々たる礎石横はり。其の面影の一斑を留めたりき、口碑に徵すれば往古村山地方は一大湖なりしを、貞觀年中開山慈覺大師は、北村山郡最上川筋基點といへる難所の岩石を開鑿せし爲め、湖水忽ち涸れ、一方に於ては舟楫に大なる便利を與へ、他方に於ては幾多の耕地を墾き得しを以て、庶民深く其恩德に感じ、一寺を此所に建立して安養院と稱したり。其の後御殿を通過する舟は、其都度若干の資を獻じ、又毎年戸毎に稻壹束宛を當院に納めて以て此の寺を維持せり。後世其の資を知代と唱ふ。正平中寺を南村山郡楯下村に移し、元和年中更に同郡半郷村に轉し、安養寺と號し禪宗と爲れり。又此の遺跡の傍には

維新前まで老大の櫻樹あり、西行の植うる所なりとて、西行櫻と稱せり。山寺小學校の入口吉野櫻のある所は其の位置なり。又其後方山巓老松の茂れる處に山末の宮あり。山王二十一社下七社の一なり。健御雷神、經津主神を祀る。

○熊野權現宮

字宮崎と川原町との間に在り、下の八王子宮とも稱す、天御中主尊を祀る、例年九月十三日を以て祭禮を執行す。明治維新の際村社に合祀す。

祠の旁なる一株の老松は山寺七木の一なり。

○三輪稻荷社

熊野堂の東にある小祠は稻荷明神を祀る。山寺十二明神の一なり。

○八王子宮

山王二十一社上七社の一なり。國狹槌尊を祀る。延久四年四月比叡山坂本にて日吉祭を修せらるるに擬し、山王二十一社を勸請せし時、此の社を建設し、前なる立谷川の田樂淵を以て琵琶湖に準へ、中島に辨才天を安置し竹生島に擬したり。昔時毎年四月中の申日に山王權現の大祭禮を施行する時、神輿を此の宮に奉し、後ち本社に歸るを例とせり。維新の際朱印地を失ひしを以て神體を根本中堂に移し、遂に廢宮となりぬ。

○十禪師宮

八王子宮の東に在り、山王二十一社上七社の一なり。天津日高彦火々瓊々杵命を祀る、維新の際廢宮となりぬ。

○早尾權現社

川原町に在り、日本武尊を祀る、山王二十一社中七社の一なり、老杉蓊鬱たる裡に飛泉かゝり、藤花紫纓を垂るゝの候風景佳なり、當時は本社を不動堂と稱し、其の淵を含滿淵と稱し、一大碧潭なりしが、

今は僅に其の面影を存するのみ。

○對面石

立谷川に兀立せる名石あり、之を對面石と曰ふ、慈覺大師當山創建の際狩人磐司(磐司カ事後ニアリ)に遇ひ、土地の狀況を問ひし所なるに因り、名つけしと云ふ、四月中の申大祭禮の時神輿の渡御に當り此岩上にて諸鬼神を祭る神供を爲すを例とせり、傍の欅は山寺七木の一なり、漸々枯れ朽ちて今は只一株のみとなれるは惜む可し。

○高橋

對面石の東立谷川の淸流に架するものを曰ふ。二口峠を經て宮城縣に通ずる道路にして、明治十四年の頃北村山郡關山新道を開鑿するまで幾百年間、本縣と宮城縣の交通は此の線によりしものなり、是れより縣界二口峠まで二里十五町、仙臺市まで十四里あり、高橋を渡れば直に南院の堤防なり、寶珠山は一眸中に入る。

清原長閑居

高橋夕照

高橋を渡る夕日のまはゆさを
　めつるか賤もしはしたゆたふ

南院の藤

尊さや藤は千年の春を咲く　十一世花本聽秋

寶珠山前溪所見

怪巖重疊闢二雲屏一。　木末香龕小似レ星。　末松靑萍

一幅宛然看欲レ動、　雪舟畫裏活丹靑。　岡千仞

呼吸天閽手捫レ星。　望中萬壑列二雲屏一。

丹崖翠壁活圖畫、　詩眼靑レ於二佛眼靑一。　竹內峴南

石作レ龕兮樹作レ屏。　山高天近可レ呼レ星。

勝跡　早尾權現社　對面石　高橋

夜深水語急」於」雨。　滿澗凝嵐斜月青。

○東宮御野立の碑

立谷川の對岸にあり明治四十一年九月

今上天皇陛下未だ東宮にましませし時此地に於て寶珠山を御展望遊ばされし處なるを以てこの光榮を不朽に傳えんが爲め村民相諮り記念碑を建設し、表には當時の縣知事馬淵鋭太郎閣下が東宮御野立乃地と題せるものを刻し、裏面には當時の郡長藤澤與則氏の村民に對し　殿下の宏德に答へ奉るべき希望を記せし文を刻せり。

○山王橋

山王橋は元高橋の東に在り、一に神橋と稱す。田樂淵に渡るへく架せしものなり、昔時四月中の申日祭禮の時田樂法師の沐浴せしは此の淵なり、然るに明治三十五年河勢の一變せし爲め廢橋となりぬ。

○王子宮

山王二十一社中七社の一なり、伊邪那美命を祀る。昔時祭禮の時には此處にて田樂舞を行ひしと云ふ、維新の後朱印地を失ふと同時に廢宮となり、神體を根本中堂に移せり。

○根本中堂

本尊藥師如來	木製坐像	慈覺大師作	御丈四尺五寸
日光菩薩	仝　立像		御丈四尺七寸
月光菩薩	仝	慈覺大師作なりしを德川氏の命に因り東叡山と交換	仝
十二神將	仝		御丈四尺
不動尊	仝	不詳	御一尺八寸事
釋迦如來	木製立像	作者不詳	御丈不詳
阿彌陀如來	木製立像	作者不詳	御丈不詳

勝跡　三王橋　王子宮　根本中堂

本堂は國家鎭護の道場にして貞觀年中慈覺大師の創建に係る、後ち正平年中最上義光の祖出羽按察使斯波兼頼之を再建し。弘化三年內陣を塗替へ、嘉永年中編明院情田屋根を木羽に葺替へ、明治二十一年十二月、內務省より保存金貳百五拾圓を賜り、仝四十一年特別保護建造物と爲る、本堂は十間四面あり、向拜四間に一間四尺、前面の鰐口(徑三尺三寸)は山形甲斐守源光直の寄附にして、後記の如き銘あり內陣の左側に安置せる厨子入三木像(毘沙門天立像四尺六寸五分、吉祥天女仝三尺四寸五分、善儞子童子仝二尺七寸五分)は最上出羽守義光の母嘗て子なきを憂へし時、立石寺學頭圓海和尙の說を信じ深く此の像を拜し遂に義光を生めりと云ふ。其傍の木像は傳敎大師(坐像御丈二尺五寸)にして開山大師が自刻せし所なり、每月二十四日法會を行ふ、中堂の法祭は大師開山以來每年三月二十五日にして明治二年まで左の舞樂を行ひ、其後ち、中絕せしが

三十六年に至りて之を再興せり。

一、燕舞　二、太平樂
四、二の舞　五、神儺、還城樂、秡頭
七、納蘇利　八、大回向

舞人

龍　西村山郡谷地住　開山大師一子相傳　林越前頭源政照
虎　當山坊中
梅　同
竹　同

樂人貳人

笛役　谷地　此笛は大師の作と傳ふ　影澤三左衛門
太皷役谷地　松浦三右衛門
鐘皷役　當山坊中

本堂の構造を詳述すれば左の如し。

桁行五間五十六尺　梁間五間五十六尺

軒高二十尺　棟高五十八尺三寸

構造形狀

桁行五間　梁間五間　單層　向拜一間

三方椽前九尺四寸左右七尺二寸　前面五戸東側二戸西側一戸後方一戸

内陣外陣此の境界組子戸、組物三塔組、

屋根

垂木二重垂木　木羽葺

屋根入母屋造

内陣宮殿

寸尺

桁行二十五尺　梁間五尺五寸

軒高十三尺八寸　棟高二十尺二寸六分

構造形狀

桁行一間　梁間三間　單層　向拜一間

三方椽　前面中央一戸其左右二重檀

東西兩側板張　組物三塔組　垂木二重垂木

屋根前は軒唐摶風　左右は唐摶風　木羽葺

裝飾

内陣　白木　外陣　春慶塗拭板共

鰐口銘

奉爲寄進鑄之鰐口一個羽前最上安曾郡成生庄寶珠山立石寺中堂

藥師瑠璃光如來御寶前右旨趣者當國守護府中山形源義光朝臣

爲御壽命長遠息災堅固文武久興累光安隱也

于時慶長十三年戊申十月二十六日願主山形甲斐守源光直敬白

諸の病を愈す誓ひかな
　久す師の佛仰く國民
なさけなく散るのが花の情哉　八十九翁　清原長閑居

○清和天皇　御寶塔　桑　月

當山は清和天皇の勅願所なり、然に元慶四年十二月四日天皇の崩御し給ふに當り、一山の衆徒寵恩に感泣し遺德を慕ひ奉り、御寶塔を中堂の西北隅に建て法會を執行し、皇祚無窮天下泰平を祈り、爾來朝夕禮拜して以て今日に及へり。特に盂蘭盆會には御寶塔に御飾を施し、一山の衆徒を會し讀經を爲すを例とす。

○橋殿

比叡山の橋殿に擬せしものにして、東谷より來る溪流に架せり。石橋の裏に梵字を書きたるものなりとて明治維新前までは當山學頭にあらざれば、渡ることを許さゝりしものなり。

○姫岩

清和天皇の御寶塔の後に當り、寶珠山腹にある巨巖を姫岩と曰ふ。洞穴頗る奇觀なり、岩上には背後より登ることを得へく、風景愛すべし。特に老松は宛も龍の蟠り虎の踞るが如く、風籟溪水の音に和し坐ろに心耳を澄ましむ。

○二の宮三の宮

二の宮は山王二十一社上七社の一なり。國常立命を祀る、三の宮も同一にして惶根（カシコネ）命を祀る。

○日枝神社

元大宮山王權現と稱し、維新の後村社と爲る。貞觀年中開山慈覺大師一山の守護神として千手院に鎭座せしを文錄年間現在の地に移せしものなり。延久四年四月二十三日比叡山坂本の日吉祭を修

せらるゝに擬し、山王二十一社を勸請し、毎年四月中の申の日を以て大祭禮を施行し、又維新以前は毎年三月二十四日左の舞樂を擧行せり。

一樂屋にて着濫聽
二大衆集會の樂
三讃(衆僧舞臺にて唱ふ)
四舞樂
　燕舞　三臺　太平樂
五兒舞
　神儺　長保樂　蘇利子　林歌　島鹿
六舞樂
　凌王　納蘇利

○日枝神社棟札(其一)

羽州山形山ノ寺
　山王ノ宮棟札
天文三甲午
出羽國最上郡寶珠山立石寺

大威德院　山形殿
院主貳貫文　中野殿　壹貫文
別當十貫文　東根殿　壹貫文
　高楡殿　壹貫文
小勸進貳貫文　六十六部聖
　願主　日向住　有西
建退十貫文
大町和泉壹貫文
黑田下總壹貫文　小工五十人
大工岩松右馬尉吉橿
　作仕　拾人

（其二）

聖主天中天迦陵頻伽聲
本願主威光坊高盛

再興　大工安西與一郎佐藤國氣

哀愍衆生者我等今敬禮

元亀四癸酉五月吉日

○阿所川

寶珠山の中谷と西谷より出る溪流の稱なり、立石寺院號阿所川院といふは實に此の川の名に因る。

夕月夜阿所の川邊の螢かけ　長閑居

うすれて飛ふもすゞしかりけり

○常行念佛堂

本尊は寶冠の阿彌陀如來（宮殿入坐像、惣丈四尺八寸佛身二尺八寸の木像）を安置せり。常行念佛退轉なく、三界萬靈有緣無緣回向の靈場にして、往昔開山大師か支那の五臺山竹林院に於て授かりし念

佛三昧の法を修する所たり、本堂はもと中堂の東にありしを、元祿四年院主英海僧都の代、山形の豪商西谷善相の資金喜捨に因てこゝに移せるものなり。堂は四間四面あり、藤原秀衡の菩提所にて德川將軍家の靈碑其他山形二十四萬石鳥井左京亮、並に同十五萬石從四位行侍從兼大和守源直基、法名佛性院殿鐵關了無大居士（松平家）等の靈牌を安置す。扁額は東叡山五世兼立石寺貫主公辨法親王の御筆にて、文字は常行念佛堂とあり。

○鐘樓

念佛堂側の鐘樓は、五佛院大僧正壬生優田の建立せし所なり。大さ貳間四面にして、鐘の直徑二尺三寸、竪龍頭までは四尺あり。

○芭蕉翁の蟬塚

表門の傍に在り、最上林崎の壺中等、芭蕉翁が山寺の句を認めたる短册を埋て塚を築き之を蟬塚と名く、奥の細道に曰く。

山形領に立石寺と云ふ山寺あり、慈覺大師の開基にして殊に清閑の地なり、一見すべきよし人々のすゝむるにより、尾花澤よりとつてかへす、其間七里斗也、日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる、岩に巖を重て山とし、松柏年舊、土石老て苔滑に岩上の院々扉を閉て物音きこへず、岩をめぐり岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覺ゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

なつかしやいく時雨經し芭蕉塚　公羽

きゝわけよ時雨の味を虛と實と　聽秋

葉櫻や苔撫てゝ見る翁の碑　稻女

○多寶塔

青銅製の寶塔にして、釋迦、多寶の兩尊座像丈六寸の銅像を安置す。奥の院の御前佛にして、嘉永二己酉年初秋、院主遍明院情田の代、東叡山惟是院權僧正覺田、津梁院覺桃、寶光院隆田が、法緣父母親屬有無兩緣佛果菩提の爲めに建立せし所なり、寶塔の惣高一丈三尺六寸、銅製の部分八尺二寸あり。

○出羽國司鳥井侯の石碑

鳥井忠政山形二十四萬石に封ぜらる、然るに其の實額之に達せざりしを以て當山の寺領を侵掠す、加之或は殺生の禁を犯し或は銘木を伐る、中興貫主一相坊圓海、之を幕府に訴ふ、省せられず、更に本山に訴へしも要領を得ず、是に於て瀧の原の大瀑の不動尊に禱ること三週日、忠政俄に病て卒し、其の後も不幸多かりしにより、嫡男伊賀守忠恒、家老及ひ弟戸澤越中守忠盛、姉聟酒井宮内大輔忠勝等と諮り、當寺と和睦し、所領若干を寄附し、父の墓を當山に建設せり。

墓面には、

寛永四年丁卯四月廿日

俊嶽院殿四品律山玉雄居士

爲正當

と刻せり、傍に老臣猪狩加次衛門恒光、高須彌助信次の墓、及ひ高須源兵衛信富、柳田主水長奥が奉納せし石燈籠あり。

○當山院主の石碑

右折して寶珠山に登らんとする處石の冠木門ありこゝを過くれは、其の右方を立、石寺住職四世惟職院宣雄僧都以來の塋域と爲す、鑑古僧都情田僧正等の墓は皆此に在り。

○姥堂

本尊は地藏菩薩にして、奪衣婆の座像丈一尺九寸の木像を安置す。堂の大さ間口九尺奥行一間あり、慶長十年最上出羽守義光の家臣本間出雲守が修繕せしものなり、傍の岩間より清泉滾々として湧出す、盛夏の候附近皆此冷泉を汲む。

○笠投石

姥堂の前なる巨巖を笠投石といふ、俗説には開山大師登山の際笠を此の岩上に置きし所なりと云ふ、蓋し岩の形狀に因りて命名せしものなるべし。

○炷香岩

香の岩ともいふ、昔開山大師香を焚きて諸佛を拜せし所なり。岩上二三席を容る、一望の中悉く奇岩怪石ならざるなく、或は削出して天を刺し或は俯伏して綠樹翠草の間に隱見し、且つ山麓なる田疇の井列村落の碁敷歷々として眼に在り、身は宛も畫中に在るが如く、當山屈指の佳景なり。

○御手掛岩

慈覺大師開山の際手を掛けて登られし舊蹟なりといふ。道幅甚だ狹けれども此の傳説によりて舊觀を改めず。

○四寸路

岩石左右より突出して通路狹隘にして殆と四寸許なるを以て四寸路の稱あり、一名を親子路又は子孫路ともいふ、蓋し登山の際兩親が嘗て蹈みし所を其の子孫等復た必ず蹈まざる可らざるを以てなり。一說に親とは大師の事なりともいふ、此の邊一帶を御作の道と稱す、昔時立石寺第二世安然この地を去らんとするや記念として手つから己の像を其の傍の岩に刻し、去て各地を修行せしが、延喜十五年二月十九日出羽國置賜郡時澤村の洞窟に入定せり。和尙は深く密敎を究め又悉曇を能くし幾多の著書を有し特に童子敎の著者として廣く世に知られ、又嘗て親しく兒童を敎育せしことあり、當時天下に並ひなき佛學者にして高德の名僧なりしと云ふ。

○東瀑

明治四十一年九月皇太子殿下行啓の際長へに其の光榮を記念すべく東谷の水を引きて造りたるものなり。

○御休石

一名佛臥石ともいふ。石欄を以て四方を圍めり、開山大師登山の際休息せられし所なりと傳ふ、蓋し其の形涅槃像に似たるを以て佛臥の稱あるなり。

○大杉

一に卒都婆樹と稱す。昔時は此の木の下に卒都婆を納めしといふ、是は亡靈供養の爲めに納むるものにて、紀州高野山と共に廣く世に知らる、此樹は山寺七木の一なり、惜哉明治三十五年九月二十八日大暴風雨の折斷する所となり、今は其の株跡をも存せず。

○彌陀洞

大杉より少しく磴道を登れば、右方に巨巖の中央陷りて洞となれるものあり、之を彌陀洞と名く、恰も彌陀の像の如し。高さ一丈六尺あり、故に又丈六の彌陀如來ともいふ、宛然頭肩及衣袖等の形を成し、殆んと人工を經たるものゝ如し、單に此岩をのみ見ば、誰れか人工にあらずとせん、浸蝕作用の結果實に奇といふべし。

○東谷靈池

彌陀洞より山腹を横ぎり東谷に出れば、靈池あり、清泉掬すべし。此間僅に數丁。

○琵琶石

彌陀洞と道を挾んで左方にある大さ三丈許の岩は、其の形により琵琶石と名く。而して左右は斷巖絶壁にして老杉參差として路を擁し、僅に晴空の蒼々たるを見るのみ。

○仁王門

當山の山門なり、嘉永年中先々住偏明院情田僧正の再建せし所なり。結構莊嚴、左右に兩金剛並に十王像を列せり、堂は間口四間奥行二間三尺あり。

二王尊　木製立像　丈　七尺
十王尊　同　坐像　丈　一尺五寸

雲慶十三代孫平井源七郎作
法橋七條左京作

○龍吻岩

龍の口ともいふ、仁王門の右にある奇巖にして、霖雨の際中谷より流出せる溪水は皆爰に集注し殆んと龍の口吻より出るの觀あり。故に名く。仁王門の東北の角より之を望むを可とす。

○觀明院

山上の衆徒寺にして十二院の一なり、本尊は阿彌陀如來を安置す。一年兩度の祭禮及ひ盂蘭盆會には立石寺に於ける彼の卒塔婆の書寫場たり。

○護摩壇

觀明院の東龍吻巖の上、巖洞稍平坦なる所あり、此を爐壇石といひ、又護摩壇とも稱す、昔開山大師が國家安穩佛法興隆の爲千座の護摩を修せし所と云ふ。爐壇猶存せり、然れごも險を冒して尋ぬるもの甚だ稀なり。

○性相院

山上十二院の一にして本尊阿彌陀如來を安置す。奥州大守伊達政宗母公の日碑所なり、寶物には左の二點あり、何れも頗る逸品と稱せらる。

毘沙門天王　木像一體　運慶作　高三尺一寸五分

阿彌陀佛　同　開山大師作　高一尺一寸五分

○金乘院

寶珠山上十二院の一にして本尊は地藏菩薩を安置す。天保十一年六月旭海の再建に係る。

地藏尊　木像　高三尺一寸五分

不動尊　木像　高一尺九寸

この地藏尊は古佛にして靈驗著し本尊の左右には千體地藏菩薩を安置せり。

○胎內堂

金乘院より右に折れて進めば、天斧を以て削り成せる如き巉巖面に當て峙つ。其の缺けたる處より梯棧を躡み、匍匐して入る。之を胎內寶といふ、一宇あり胎內堂と稱す。二間四面あり、更に梯に憑りて屋上に上れば岩洞に地藏尊を安置せり、立像丈一尺七寸の木像なり。

○釋迦堂

釋迦堂は寶珠山上最も佳景の處とす、胎內寶より峨々たる岩石を

攀ち、鐵鎖を縋すこと二回にして、更に進めば行者戻し（又名地獄谷）に至る再び鐵鎖に憑りて其の傍を下りそれより開山大師の座禪窟なる一大岩洞を經れば直に南出の岩角に出づ、架堂に釋迦佛の像（木製座像四尺五寸）を安置す堂は間口二間奥行三間あり、更に巖頭に上れば身既に千仞の絶壁に在り、巖上の老松は走るが如く、飛ぶが如く、蹲るが如く、舞ふが如く、或は立つて天を衝かんとし、或は倒れて巖石と鬪はんとす、清風一たひ起れば、萬籟颯々の聲を生し、自然の音樂となる。前方を瞰めば奥羽の中央山脉遠く南北に疾走するを見るべく其の支脉の綿亘として翠を疊み碧を走らし、波濤の起伏するが如し。而して七石の一なる鳴石、天工の戯をなせる潛岩及ひ大黒岩（岩洞ニ古峯神社ヲ祈ル）削然として聳立せる立岩（夕日觀音ヲマツル）等前後十數の奇巖あり、又此脉より二條の溪流を出せり、右なるを立石川と稱し、源を二口峠に發し、上下約二里あり、左なるを楓川と呼び、源を面白山に發し、上下幾んと四里此間所謂面白四十八瀑を構成し來て田樂淵にて相會し、立谷川と爲る、此裡村落處々に點在し、豆人寸馬呼べは將に應へんとす、顧みれは寶珠岩錯立して天を刺し宛として塔の如く以て寺號の起因を示し、左方には籠岩、佛巖等並立し、奇狀幻態天地の變を蒐む、實に山上唯一の佳景なり。又釋迦堂の下方絶壁の岩洞に窓の梅あり、行者戻しより險を排みて行くことを得るも、之を尋ぬるもの鮮し。

絶壁層々入レ翠微一
躋躬攀上千尋石。
寶塔巖
忘筌妙理入レ玄微。
千古紫雲籠二寶殿一。

勝跡　釋迦堂

末松青萍

無邊雲木帶レ斜暉一
俯瞰中空健鶻飛
從三位西岡逾明
巖塔崇々對二落暉一。
清宵仰看彩鳶飛。

山寺山

釋迦峰聳現二慈顔一　　大内青巒

松蒼苔滑崛勢斷。　　天狗巖屹鬼神删。

未レ到二半腹一神欲レ死。　　仰把二鐵鎖一纔躋攀。

艱極回頭天地濶。　　危殆艱似世路難。

陰々暮鐘響二山下一。　　遠山近水落二眉間一。

我亦斯境不レ可レ住。　　翻々倦鳥衝レ雲還。

巖に登り得たる喜ひ松涼し　　温亭

山寺を離れつゝ雲の峯動く　　同

絶頂巖頭の秋晴の吾と誰か見ん　　櫻魂子

月夜雁の雪誘ひせん岩聳ゆ　　同

風荒き岩に手をかけて登る秋空　　同

地獄谷下る女あり落葉風　　北山

吾と並ぶ峯雲を松山に見る　　乙字

秋深し巖にくだくる風の音　　公雄

○準提堂

釋迦巖の頂上より別路を巖背に取り、岩蔭をすべり、鐵鎖によりて下り、岩洞を過れば一宇あり、準提堂といふ。文久中當山五佛院大僧正壬生優田の建立に係る堂は一間四面にて準提觀音（厨子入座像丈二寸ノ木像）を安置す、扁額は仙臺の儒家大槻盤溪翁の筆なり。傍の窟潭を血池と呼ぶ、婦女血盆經を投し觀音を拜し以て汚穢を除き罪障を滅すと云ふ、傍に六觀音堂あり、大さ一間四面にて木像六軀を安置せり。

○中性院

山上十二院の一にして、本尊は阿彌陀如來なり。中興孝順の再建せし所とす、院後の巖窟には新庄戸澤侯歷代の石碑あり、同家より寄進せし佛具は今尚ほ現存す、此の寺の寶物は左の如し。

正觀音　木像　一體　高壹尺五分　作者不詳
仝　上　金銅　一體　仝九寸六分　推古式
阿彌陀如來　木像　一體　仝壹尺七寸八分　作者不詳　天海僧正ヨリ最上義俊ニ送リシモノ
慈眼大師眞筆　一通　慈覺大師作
不動像　木像　一體　仝九寸八分
仝　上　仝　一體　仝壹尺八寸二分　作者不詳

○最上義光の靈屋

中性院の前なる小龕堂には、最上出羽守義光並に其の一族の靈を祀れり本尊は地藏尊(木製立像一尺一寸)とす。

慶長寺殿前少將羽州太守玉山白公大居士　山形出羽守義光
盛廣院殿安景長公大居士　義光嫡男家親
賞通忠公禪定門　長岡但馬守
直庭正公居士　寒河江肥前守
恬翁吉居士　寒河江十兵工
即永心公禪定門　山家河內守
良源院殿前監門直譽松屋道慶大居士　義光次男山の邊義忠
崇嶽院殿前土州圓譽隆閣秋白大居士　義忠長男土佐守義堅
涼清院殿泰巖淨照居士　義忠次男義致
天運道清居士　忠　賴

○納骨堂

死者の齒骨を納むる所にして、本尊阿彌陀如來(木製立像三尺一寸厨子入)を安置す。堂は間口九尺奥行二間あり、老弱男女來り詣で、僧に請ひ經を誦せしめ以て追福を薦む、齒骨は後之を岩窟に納め、每年秋季皇靈祭の當日一山衆徒を會し大施餓鬼を施行す。

○一切經藏

文久年間開山慈覺大師入定一千年記念として貫主大僧正壬生優

田の建立する所にして、梁朝傳大士及ひ其の左右には普成普賢等の像を安置し、法輪には經文一切を藏せり、其の前には露佛の地藏尊あり、唐銅にて坐像丈二尺五寸あり。

○飛　梅

八房梅又は安樂梅といふ。元亀貳年天台宗本山比叡山は、織田信長の爲に灰燼となる、此時宗祖傳教大師が支那の天台山より移せる燈火も共に滅せしを以て當山より分移せしが其際記念として植ゑしものなりといふ白色多雌蕊にて香氣甚た高し實は同じ蒂に數個を結ぶ、尋常の梅より小なり、此種の梅は奇なるが故に嘗て後水尾天皇より花香實の號を賜はりしと云ふ。

○獨鈷水

山中唯一の井なり、昔開山大師山上に水無きを憂へ獨鈷を以て加持祈禱せしに一夜の中に此の清泉湧き出てしと云ふ。大旱と雖も涸るゝことなし。

獨鈷清泉　　作者不詳

濁りなく影さへうつる山の井は
　妙なる法のかがみならまし

高札も手に汲むまじと法清水　　作者不詳

法の地や露も誓の獨鈷水　　極處

○多聖塲

祖先の冥福を祈る爲め卒都塔を納むる所なり。紀州高野山と並ひ稱せられて其名高し、法華塔（總高一丈一尺寶塔四尺六寸）は唐銅製にて法華經を藏む文久元年東叡山靈山院官田の寄附に係る。

○金燈籠

明治二十八年大僧正壬生優田の發願によりて建立せしものなり高さ十六尺三寸、臺の高さ四尺七寸、總高二丈一尺あり。

○如法堂

如法堂は即ち奥の院にして、燈道はこゝに至りて窮る、麓より八町燈道總て一千級と稱す。本堂は四間四面、庫裡は間口二間奥行四間あり、此の堂には開山大師回國の際常に負ひし所の三國傳來の釋迦多寶の兩尊（寶塔入坐像丈三寸五分）を本尊とし、左右に多門持國の二天並に十羅刹女を安置し、高祖傳教大師が比叡山根本中堂に挑る所の燈火を移して常燈とし、四海安穩上下和睦の祈禱を修する道場たり。堂宇は明治二年火災に罹り、仝五年五佛院大僧正優田の再建に係る、此の火災に際し慈覺大師筆法華經一部、建暦二年法華經一部、竹帛の曼陀羅、紺紙紺埿の法華經等を鳥有に歸せしは惜むべし。當堂には衆徒寺より一人一ケ月つゝ順番に當直し、齊戒沐浴し、清服律衣を着し、供華燒香禮懺行道、晝夜懈らず、山門横川の法式を模し、石墨草筆（往昔使用セシモノ立石寺寶物トシテ今尚存ス）を以て淨紙の經地に一日七行半の法華經を書寫し、閏月の年十一月二十八日寫し畢りたるものを、開山堂の傍なる納經堂に奉納す。此際帳を開き信者に參拜せしむ、又毎年秋季皇靈祭には大施餓鬼を行ふ、前面虹梁の龍は左甚五郎の刻せし所と云ふ額には靈鷲道場とあり、松島瑞巖寺百十二世の書なり、こゝにて左記の寶物を拜觀し得べし。又傍の鐘樓は九尺四面にて、鐘は口徑二尺二寸五分竪四尺一寸あり、文久三年開山大師一千年の忌辰に當り、阿部孫市郎外數名の寄附せし所なり。

立石倉印	南蠻鐵	清和天皇下賜	方一寸五分高二寸
鈴	黄銅	慈覺大師所持	長七寸
五鈷	仝	仝	仝
三鈷	仝	仝	長六寸
獨鈷	仝	仝	長六寸五分
佛舍利	碼碯	大師支那五臺山にて得られしもの	壹粒

珠數　水晶　慈覺大師所持　二連　回一尺七寸五分同一尺
牛王の玉　仝　徑八分
名馬の角　仝　長一寸五分

山寺奥之院に詣て　可　翁

聞く人の心の雲もはれぬべし
法の御山の松風の音

山寺奥之院にて

女迄踏みて目出度し奥の院　不　宰
合す手の先から冷を覺え鳧　篁　洞
山寺や登りつめれば子規　幹　雄
身にすゝし名も山寺の鐘の音　由　也
千年の法燈もるゝ若葉哉　稻　女
水菊の花や慈覺の露の降る　碧　梧　桐

○三重塔

三重塔の建立は永正十六年己卯六月靜運の寄進にて、十穀靜允の作なり、其の構造左の如し。

初重方　一尺五寸　軒高　一尺八寸五分
二重方　一尺二寸五分　仝　三尺二寸五分
三重方　一尺　仝　四尺五寸
露盤下まて高五尺三寸
相輪頂まて高八尺二寸

（三重塔銘）

羽州立石寺岩屋
石黑三河
[illegible]立者淨運
十穀靜允ノ作
榮壽　榮全
永正十六年己卯六月吉日

○華藏院

當山十二院の一にして、慈覺大師作の觀世音菩薩を安置す、こゝより釋迦堂を望み、風景愛すべし。

關北靈窟山寺奥の院を拜禮し花藏精舍に宿り翌日初雪のいと美はしく降りけるを愛て詠侍る

八十六叟　清原長閑居

巖にも雪の初はな咲き匂ふ
光を添へし法の山寺

○東宮殿下御休息所

寶珠山上秀美集れる籠巖の下に建築せる宮は皇太子殿下の御休息所なり。前面には釋迦の峻巖横はり、亭々たる幾百の老松は枝古り苔蒸して、岩頭に立ち、右方一帶は疊翠走碧の中、名石散點し、左方には喬木の參差たる邊、奥之院一帶の佳景眸中に入る、實に奥羽の景は山寺に在り。山寺の景は寶珠山に集り而して寶珠山の景はこゝに集れりと謂ふべきか。

○挹翠亭

皇太子殿下御休息所の傍なる亭舍を挹翠亭と曰ふ。山上唯一の好地なり。

○帝釋天祠

佛岩の下大槻の傍に在り、七尺四面の堂なり、弘仁式の古像を安置す、開山大師の創建にして現在の堂宇は天保四年十月十日學頭慈雲院慈舜代の再建に係る。

（帝釋天棟札）

其一

聖主天中迦陵頻伽聲寶永四丁亥曆五月十五日
奉再建帝釋天堂天下泰平國土安穩五穀成就諸人快樂如意滿足祈處

哀愍衆生者我等令敬禮

東叡山龍城院惠寂

院代寒松院豪順

施主　上山寺　金子□□□

施主　下山寺　伊澤三右衛門淨全

大工　吉田彌作信親

加藤次郎右衛門昌重

其二

聖主天中天迦陵頻伽聲天保四癸巳曆　大工　佐藤惣助

奉再建帝釋天堂一宇天下泰平國土安穩五穀成就諸人快樂　佐藤助藏

哀愍衆生者我等令敬禮如意滿足祈所

天保四癸巳十月上十日當山貫主大慈雲院慈舜代

木挽　小野定吉

小野文治

○開山祠堂

本堂は開山慈覺大師（木像坐像二尺八寸五分）の像を安置す、間口二間奥行四間あり、偏明院情田僧正の再建せしものなり。嘉永二年着手同四年竣功せり、毎月十四日一山衆徒會集して忌日法會を修す、且毎年陰曆の正月七月の十四日には、開扉して衆庶に參拜せしむ、厨子内の木像も開山大師にして、大師幼少の時植えし椿の枯樹を以て刻せしもの。情田僧正代大師の誕生地下野國より寄進せりと云ふ、又厨子の右なる畫軸は立石寺中興圓海僧都の像なり、堂の西に僧都の墓あり。

靈窟や慈雲去來す五百却　聽秋

入定の靈窟凄し苔の花　七松

○納經堂

奥之院如法堂にて書寫の法華經を奉納する所なり、此堂は開山大師の創建に係り、其の後慶安四年七月最上出羽守義光の祈念に因

り、其の臣菱和田讃岐守金右衛門尉の修造せるものなり、本堂六尺四面にて建築學上見るべきものなりと云ふ。

納經堂構造

桁上柱七尺三寸。軒下七尺三寸。總高十一尺三寸。椽下三尺。

四方板張。正面開戸。柱三ツ塔組立

納經堂棟札　其一

菱和田讃岐守金右衛門尉

山形義光依御祈念令修造處如斯

奉聖主中天迦陵頻伽聲哀愍衆生者我等令敬禮

于時慶長四己亥年七月吉日

于時ノ大工　安西九郎右衛門

益子太郎右衛門

渡名邊木工助

裏書

圓乘本願阿闍梨位祐澄判

假治　齋藤孫四郎

矢作助太郎

益子小一郎

其二

寶永二乙酉天九月吉辰

奉修補納經塔佛法興隆祈所

大工　清作

次良右衛門

兼東叡山楞伽院代安祥院義然

裏書

去ル寛文土季辛亥葺替

學頭看主亮俊　窓順代

大工　新助

與兵衛

○如法經所の碑

天養元年八月當山貫主第八世圓眞法印の代建立せし所なり。大正四年三月國寶に指定せらる、此の碑はもと開山堂の東入定の靈窟の頭にありしが、雪の爲めに轉落せしを近時更に開山堂前に移す碑の文字頗る古雅なり。

立石寺如法經所銘並序

維天養元年歳次甲子秋八月十八日、丁酉眞語宗僧入阿大德兼濟在心、利物爲事、同法五人、凝志一味、敬奉レ書二妙法蓮華經一部八卷一、精進加行、如經所說、殊仰大師之護持、更期二慈尊之出世一奉レ納二之靈崛頭一既畢願、令レ參二詣此地一之輩、必結二禮拜一、此經之緣因、一見一聞、併慶二巨益一、上則游二知足之雲一、西則翫二安養之月一、于時有釋以慶乃作レ銘曰

善善上人、寫經如說。利益所レ覃誰疑記蒭。

○入定岩

開山堂の後の削立せる千尋の絶壁を曰ふ。一に百丈岩と稱す、上部に一大洞窟あり、是れ大師の入定せる處、世俗に御金棺と稱したるが現今は入定窟と呼へり、洞口は三間高さ四尺あり。

○五大堂

本堂は西の崎まる處海拔四〇〇メートルに在り。間口五間奥行三間あり、五大尊明王の像を(東降三世明王、西大威德明王、中央大聖不動明王、南軍荼利明王、北方金剛夜叉明王)安置す。開山大師秘法を修して久住を祈りし遺跡なり、正德四年東叡山證明院兼中院代安詳院之れを再建し、嘉永五年偏明院情田改葺せり。當山中道路少しの危嶮なくして前山の佳景を望み得るは、只此堂と挹翠亭の附近のみとす。山麓より此堂を望めば、釋迦堂、開山堂と共に千尋の巖壁上に峙ち、樹木蓊鬱の中に映出し眞に畫中の觀あり、又此堂より下瞰すれば、山川、村落、奇巖、深溪點々指呼の中に在り。

落日の足下の村や蟬の聲　雨　六

鶯やこゝは經讀む五大堂　蓮舟

雪殘る山見て居ればほとゝぎす　眠石

秋更し色とは見えず巖なる　八十九翁　清原長閑居

にぬりの宮に紅葉照りそふ

空の人と吾はなりけり五大堂　普宰

山寺に紅葉狩りして暮の鐘　武藤龍山

○磐司祠

五大堂の側の巖窟を龕と爲し、磐司の像を安ず。毎年舊暦七月七日祭禮を施行す、俗に山寺の祭禮と稱し、來り詣するもの數萬人、一山は勿論山麓に至るまで立錐の地なし、往昔磐司は其の弟磐三郎と共に當山に住し、獸獵を以て生計と爲し居りしが、遂に大師の敎化を受け、深く佛法を信じ、溪澗を奔走し、大に大師に力を添たるものなり。故に今尚ほ地主の神として之を祀れるなり、山奥に磐司巖といへるあり、もと彼等が住家なりしと云ふ。この祭禮には古來近鄉より鹿子舞と稱し、猪に擬して燦爛たる盛裝を爲し來り舞ふ、豐年には十數組に達することあり、傳へ曰ふ、貞觀の昔大師當山を開き、當地一帶殺生禁斷になりし時、猪大に喜び、齊しく來て大師に謝せしに大師は余に謝するよりは磐司に謝せよと申されたりとて今尚ほ磐司の祠にて舞ひ、次に大師堂に至るを例とせり。

○白山祠

磐司祠の前なる巖上の小祠なり。伊弉諾尊を祀る、齲齒を患ふるもの來り詣ず、其の下の洞窟を筏舟窟といふ、無竟庵筏舟禪師か一切經を讀誦せし跡なり、筏舟は南越の智識なり、諸國を行脚し、當地に留まること四年、慶應二年正月二十八日七十八にして圓乘院に寂

す、遺言によりて火葬となし、骨を最上川に沈む、墓は開山堂前に在り。

○連理椿(陰陽椿)

夫婦椿ともいふ、山寺七木の一にして奇木なり、枝々合して分れ、分れて又合せり。

○賽河原

岩を削りて磴道と成せる所を上れば、賽河原に至る、窟中小石を積む、蓋し冥福を祈るものなり、其窟の上方に古像を安置せり。

○由利揚觀音

此の像は賽河原より天花巖に至る途中の巖洞に祀る、相傳ふ海中より搖り上りたる靈像なりと。

○豆石

天花巖の途上凝灰巖中に大豆を入れたるが如きものあり、因てこれを豆石と名く。

○天花岩

賽河原より岩洞を過き梯を攀ぢて再び巨巖の中央洞窟を過ぐれば、斷崖絶壁の下に出づ、匍匐して上れば忽ちにして天華巖に達す俗に天狗巖ともいふ、此の岩には古松に縁り辛ふじて上ることを得、然れども其の嶮を冒すもの鮮なし、巖の高さ實に數百仞、後方幾多の老松蟠屈する處樹根に踞して瞰めば、立谷川脚下に奔流し、眺望開豁、遠山近水一眸の中に在り、又此の岩の東方なる岩洞には朝日觀音及ひ十六羅漢の像を安置せり。

○天花岩途中

すつかりと岩にすがりて子規　幹雄
雲に入る鳥仰きけり天華岩　稻女
つかみ出しなげ出す霧や天狗岩　極處

○立石寺表門

此の門は建立の時代詳ならざるも、蓋し鎌倉時代のものならんか、間口三間、奥行二間あり、關北靈窟と題せる額は、當山貫主鑑古僧都の筆なり。本寺立石寺は屢々火災に罹りたれども、此門と中堂とは其の厄にかゝりたることなし。

○蛙岩

立石寺の東に在り其の狀宛も蛙の伏して嘯くが如し。高さ數丈あり。

○記念噴水

明治四十一年九月十八日皇太子殿下當山に行啓遊ばされし際、記念の爲め設けたるものなり、此の像は十六羅漢の中の那伽犀那尊者なり。

○立石寺

總說に記載せし如く、開山慈覺大師の入定關北第一の靈窟にして、比叡山延暦寺末の中本山なり。現境内は二十五萬八千餘坪あり、本堂並庫裡は間口十七間梁間六間あり、本尊は大師自作の座像（四尺五寸）阿彌陀如來を安置す、扁額は赤松僧正の筆なり、寶物は如法堂に藏置せるもの、外、左の數品あり。

立石寺緣起	一卷	
山王廿一社	一軸	
傳教大師	一軸	大永八戌子年
十六善神	一軸	
千手觀音	一軸	天平式
御綸旨之寫	一通	
大日如來	木像	一体
彌陀如來	木像	一體

開山大師大作

藥師如來	木像	一體	同	
釋迦如來	木像	一體	同	
彌陀如來		一體	惠心僧都作	
金胎兩部曼陀羅		二幅	開山慈覺大師支那ヨリ請來享保十五年八月修補	
法華經		一部	延文二年	
法華經		一部	公寬一品法親王筆	
古寫經		數百卷		
涅槃像	絹地金糸繡	一幅	文化年中作者不詳	竪一丈二尺 巾九尺
阿彌陀佛	木像	一體	開山大師作	高四尺五寸
古	銅	一個	慶安二年三月二十三日	直徑三寸四分
古	鏡 合金	數個	延文四年六月十一日以下直徑三寸七分	
唐子遊軸物	絹地	一幅	不詳 天保十五年修覆	竪四尺 巾二尺八寸
最上義光の書翰		二通	天正十四年正月一日 元祿十三年正月十一日	
豪盛僧正書翰		一通	天正十二年三月	
蜥蜴丸		一振	六孫王源經基奉納	總長四尺三寸 中身二尺七寸五分
阿彌陀經		一卷	有栖川宮昭仁親王筆	
輪袈裟		一領	北白川宮殿下御下賜	
硯		一面	如法經書寫用	
石	墨	一挺	如法經書寫用	
旭雁の圖		一軸	不詳 天保十五年修復	竪四尺六寸二分 巾二尺五寸
長刀		一本	慶安和泉守兼重	中身一尺一寸五分
舞面		四個	慈覺大師作	
高力士		一軸	東宮行啓紀念佐藤莊右衛門寄附	
毘沙門天之本事		三卷	最上出羽守義光寄附 永享七年閏四月十七日	
賽錢鉢		一個	慶長年間最上義光寄附	

○塔石

勝跡　塔石　千本桂　二口峠

立石寺の東凡一里立石川の上流に在る奇石中の奇石にして、宛實塔の如く、高十數尋殆んと人工を經たるものに似たり、山寺七石の一として其の名高し。

○千本桂

塔石の東十數町に在り。山寺七木の一なり、天を摩するもの實に十數條、故に名く、山王の祭禮には此の木の枝を採り、神前に供するを例とせり、此附近に瓶石あり、これ亦奇を以て著はる。

○二口峠

本村より宮城縣に通する山嶺を山伏峠といひ、其の南高瀨村より越ゆる山嶺を清水峠といふ。因て後世之を二口峠と稱す、而して立石寺奉行本間出雲守、大に山伏峠の道路を修めしより、清水峠は殆んと廢道となり、單に山伏峠を二口峠と稱するに至れり。山寺中央標より二里十五町あり、此嶺上より眺むれば寶珠山は脚下にあり、最上の平野又一眸の中に入る、東方は遙に大平洋を望み得べし。

二口嶺

峯勢彌高鳥背低。
行々詩就無人賞。
羊腸百里度雲梯。
吟與山靈石上題。

陸奥宗光

○磐司巖

奥羽中央山脈なる二口峠を越え、稍々平坦となれる處、左右に巨巖の天を衝くものあり、之を磐司巖と稱す、其の雄大なる實に名狀すべからず、相傳ふ磐司居をこゝに構へ、獵をなし、以て山寺の地に及ぶと。

○名取川

名取川は源を二口峠に發し、宮城縣名取郡の中間を貫き、東流して宮城郡の廣瀨川及ひ柴田郡の碁石川を合せ、閑上濱より大平洋に注く。流水清澄にして奇巖怪石到る處に突兀とし、水勢此に激して

飛沫雲を飛ばすの觀あり、流域は魚利に富み、往古は其の産する所の鱒、鮭、鯉等を朝貢せりと云ふ、又上流に當りて埋木を産し、又其頃より貢物を供せしことありと「東鑑」に文治五年源賴朝奥州藤原泰衡征伐のとき、泰衡壘を刈田郡に築き、柵を名取、廣瀬の西川に引く」とあるは即ち其下流をいふなり、又源重之朝臣の歌に「名取川はるの日數はあらはれて花にぞしづむぜゞの埋木」又西行法師の歌に「名取川きしのもみちのうつる影はおなじ錦の庭にさへしく」仙臺中將綱村卿の歌には「名取川の音のみ高くあらはれて浪やかすみにぜゝの埋木」と詠まれたり、其の他風流の文士詩歌に詠ずるもの少からず。

○瀧の原の大瀑

大瀑は名取郡秋保村字馬場瀧の原の奥深谿密林中に懸れり、立石寺中興圓海が山形城主鳥井忠政と爭ひ、之を禱りたる處なり、風光の奇絶にして、落下石を穿ち飛沫人を襲ひ、雲蒸し風起り、水聲囂々耳を聾し湫潭藍の如く、魚躍潑剌たり、瀑上に南面の一堂あり、不動明王の巨像(一丈七尺)を安置す、近代の僧知足なるもの、建立に係る。

遊大瀑記

齋藤竹堂

仙臺府城之西八九里、峯巒相接、溪水盤廻、皆可以遊覽、而秋保大瀑爲最勝。大瀑發於羽山之麓。而爲名取川源。凡此間境僻而勢阻。幽潛隱逸之士所樂也、相傳、往時平氏將士西海沈沒之餘、或晦迹遊此、子孫相繼、不與世接、閱數百年始入我藩版圖、世以比之於漢土武陵桃源、余以天保某歲往遊、其日出府至湯本宿、翌沿名取川而行、坂路崎嶇午上午下。經二驛、曰長袋、曰馬場、山愈深地愈僻、得不動祠、々北迤邐而降、忽聞洶々有聲、如海濤驟作、驚而顧之、四山環翠葛木參天、陰雲晦冥、如入奇鬼毒龍之崛、其西石壁束立、瀑布懸焉、直下二十餘丈、廣三之一、如簾垂如

王碎、如二銀河落一レ天、其初尙小、中間觸レ石一激而大、再激之後散爲二雲霧一紛紜濺レ人、衣襟爲レ之淋漓、毛竦髮竪、如下穿二蒼海之底一而登中雪山之頂上余又欲下桃林樾二蹤巉巖一近就二瀑下一彷徨縱覽以悉中其勝上而天方暮、溪路陰惡、無レ由レ措レ步、悵然而歸、均是勝境也、桃源漁郎歸棹之後、靡レ有二一人至者一、而淵明之文能使後世拭目、今此地也高貴造焉、士庶遊焉、而未レ有二文以傳一レ之、則幸不幸果何如哉、抑造物者遊二此地一受二惜之一而不レ欲レ顯レ於レ世邪、不レ然何設二之數千年之前一、而發二之數千年之後一、又便高貴士庶至、而未レ使二一能文之士至一也、然則其記可下以匹二淵明一而無上媿者。不レ知將待二幾千年之後何人之手一。

○七　瀑

七瀑は立石寺の東南二里餘字馬形の奥に在り、馬形は二口越の道路に當り、維新の後まで宿驛たり、此地名石亦尠からず、右方綠樹青草の裡に横はるもの、曰く大黒石、曰く潜岩、曰く馬形石（馬首に似たり長さ六尺巾三尺許あり馬形の起る處）左方に兀立せるもの、曰く立岩（夕日觀音を安置せり）曰く鳥帽子岩、立岩尤奇宛も山腹に植立せる如く頗る雄大なり、鳥帽子岩は其形鳥帽子に似たり、而して穉生叢生の裡に立て一趣をなせり、更に進めば東北の山上に一丈峻巖の聳立せるを見るべし、是を有名なる甲巖と爲す、皆奇狀人目を惹くに足る、立石川は此等諸岩の前面に曲折し、激して瀑となり、瀦して潭となる、銚子口、蓬原、仙人の三瀑布尤も著はる、こゝより右折して山徑に就き、溪流に沿ふて上れば雲樹蓊鬱晝尙暗き處風景一變す。左右巖石にして轟雷地に殷たるを聞く、瀑は實に大小七あり、或は樹根に緣り或は鐵鎖に攀ぢ、僅に登るを得べし、而して第七瀑は崖壁削立して天を摩し、飛鳥纔に雲を渡るのみ、白練飛下百尺、跳つて玉屑となり、碎けて花となり、翻りて雪となり、散して霧となり、日に映じて虹霓を噴く、眞に天然の好畫圖なり、想ふに造物主の神を役し鬼を使ひて絶技を弄せしもの

滿目の好詩料は人をして自ら再遊を誓はしむ、山寺三大奇景の一と稱せらるゝ故なきにあらず。

○面白山

面白山は立石寺の東三里紅葉川の流源に在り、山寺三大奇景中の一たり、地質は輝石富士石より成り、直立實に千二百九十二米あり途上慈覺大師作の觀音あり、此地又一趣をなし、峯浦、垂水の巖窟及ひ猫岩、材木岩等の愛すべき景あり、尚其の奥には赤山權現あり、慈覺大師山寺を經營するに當り此の地より著手せしといふ、今尚ほ本院と稱する所あり、此より愈進めば愈奇にして、面白四十八瀑は實に此の間に懸る、嗚呼山や川や瀑や、禿筆のよく得て寫すべきにあらず、左に岡千仞翁の記事を掲けて擱筆せん。

○面白山瀑布

岡千仞

面白山楓川之所レ源、村人毎レ旱禱レ雨、以二瀑布一聞、一逕沿二楓川一、山愈深而雲樹愈邃、流愈急而澗谷愈奇、兩崖懸瀑、大小四十八、其一爲二達摩瀑一、岩石兀立數尋、頂肖二人頭一、略具二眉目一、宛然達摩、瀑自レ崖上而斜注、與レ巖面背相對、更進半里許、曰二藤花瀑一、瀑幅二三十間、一齊濺射、有レ條不レ紊、珠玉燦爛如二藤花綴一レ條垂下、故有二藤花之稱一。自レ此崖岸愈峻、巖壁數十丈、嶄嵌垂下如二乳房一、巖隙爲レ竇者七、曰二毘沙門巖一、其背懸レ瀑、一條白練、劃二開巖壁一、曰二霰瀑一、三瀑皆自レ崖上而望者、其就レ崖下而仰望者二瀑、以二黑白一分稱、更行、右折行二澗谷中一、左右巖壁、皆赭色、揭厲而前、大石磊落、欹處爲レ潭、澗窮有二二瀑一而掛、一曰二鑁瀑一、崖壁斗絶、擧二鐵索一而上、故稱二鑁瀑一、一曰二雷瀑一、澎湃殷鳴因命焉、諸瀑皆自レ遠而望、此二瀑可二就而觀一焉、自二雷瀑一而泝有二二瀑一、地藏瀑爲レ奇、自二鑁瀑一泝有二三瀑一岐爲二三條一而激注者爲二三寶瀑一至レ此面白山當レ前、四麓涓流爲二兩派一、一爲二雷瀑一、一爲二鑁瀑一合流爲二楓川一、此間峯巒重疊、四絶二人迹一、而楓川劃二斷險峻一、爲二壑谷一故四集二溪澗一、羣注爲二四十八瀑一、呈二此壯觀一霜後滿山紅葉與二瀑流一映帶、曬二錦繡一眩二雲霞一、最爲二奇異之觀一。楓川之稱

源二于此一。

藤花瀑

藤花之瀑眞奇哉。　西川菊畦
幅員數丈高百丈。
飛濺一道碎二寒玉一、
絲々受レ風白搖曳。
我來清賞不レ能レ去。
漫揮二禿筆一一吟就。
嗚呼飛流濺沫萬千斛。

○石橋

石橋は立石寺の東三里に在り、方今宮城縣に屬す、鳥帽子形の東十町許にして左折、山逕に就けば直に翠澗に入る、即ち立石川の上流にして傍に奇石あり、是れ山寺七石の一として、尤も著名なる立石

とす、立石川の名稱の起る所なり、或は云ふ、立石寺號の生る所なりと、此附近には峻巖屏列して恰も一大庭園を成し、黑岩、赤岩、布曝岩、鸚鵡岩等大小十數あり、就中鸚鵡岩尤も奇なり、此處より進めば景致漸く雅にして石門岩の邊、群峰水を挾みて立ち、滿山皆石なるもあり、石破れて洞穴を成せるもあり、兩石相鬪ひて其一方將に仆れんとするあり、數層の石相重りて夏雲の狀を成すもあり、其石間より生じたる樹木は、或は横に、或は縱に、或は倒れて復起き、起きて又仆れ、龍の雲を得て天に昇らんとするが如く、猿の臂を伸して溪流を掬はんとするに似て、悉く其の趣を異にせり、山容の奇なること此の如くなれば溪水も亦隨て變化窮りなく、岩を嚙み石に激して玉の如く散り、峰影を碎きて流る、又山逕時に窮り、僅かに飛棧に緣りて渡る、此危橋を「ウツロ」といふ、こゝより奥羽中央山脈を超ゆれば、忽ちにして石橋に至る、橋や實に長さ一百五十尺高六十八尺、中

間に寶あり、寶の高さ三十三尺横七十八尺あり、溪流瀑を成し、素練七十四尺、下流は斷崖にして下る可からず、而して左右も崖壁斗絶し、四邊の雲樹蓊鬱として眞に仙境たり、歸途は別路を取り所部に至るを可とす、途上の風景見るべきものは石英粗面岩より成れる柱狀岩なりとす。其形材木に異ならず、立てるものは簇柱の如く、斜なるものは束棟の如し、概ね八角六角等にして天劒の妙實に驚くべし、其の他千手院の材木岩、猫岩、垂水岩、鹽岩等の眺めあり、皆神斧鬼削、山寺の美の幾分は確かに玆に在りと謂ふべし。

◎附錄

○山寺七木

對面石の槻　三王の銀杏樹　極樂の椿
暖澤の千本桂　南院の藤　如法堂の飛梅

○山寺七石

鸚鵡石　猫岩　硯石　垂水岩
鳴岩　立石　塔石

○名石

材木岩　鹽岩　兜岩　布晒岩
赤山岩　黑岩　鳥帽子形岩　立岩
柱狀岩　燈蓋岩　馬形石　潛岩
大黑岩　花咲石　箱岩　赤石

○山寺八景

捴翠亭夜雨　楓橋暮雪　五大堂の秋月　立石寺晩鐘
立谷川飛螢　面白山晴嵐　鳴石夕照　磐司巖紅葉

○山寺三大奇景

面白山　七瀑　石橋

○山寺より各地への里程

山形市　三里十一丁　　天童町　二里四町

漆山驛　二里十二町十五間　　宮城縣境　一里三十二町十六間

二口峠　二里十五町　　元小屋　四里二十六町廿五間

野尻　五里六町廿五間

○山寺名物と名産

もろこし菓子。深山の露(山百合羊羹)。鯉。栗。松茸。

櫻桃。葡萄。桃。石材。木炭。鼈蹶。

○山寺土産

山寺山全圖。立石寺縁記。　山寺名勝案内

山寺寫眞帖。山寺名勝繪葉書。　名所入ハンカチーフ。

山寺名所入湯呑　山寺名勝入杯

◎詞林

立石寺に宿りて讀める　淺草唯我韶舜

兼ねてより思ひ籠めたる山寺の

巖のもとに宿るうれしさ

羽前の立石寺にて讀める　平泉中尊寺　西山亮教

谷川の水の瀬々さへ石立ちて

月影碎く音をこそ聞け

辛丑の五月立石寺に詣て、　肝月兼行

立谷川流るゝ水の音さえて

夏なほ寒し山寺の庭

夏來なばまたも來て見む山形の

ながめ涼しき山寺の山

夏ながらまだ春過ぎぬ心地して

櫻花さく山寺の山

山寺にて　芝増上寺　行戒

紅葉葉を夕の風に拂はせて
　世の色見せぬ峯の古寺

山寺にて　春秋庵幹雄

慈しみ深き佛の法の山
　ふみて覺ゆる教とぞしる

法の道わけ入ればこそ白雲の
　中の巖も踏みわたりつれ

立石寺に詣でゝよめる　従二位平朝臣時萬

あふぐてふ立石寺に來て見れば
　御法の徳のたかくもあるかな

立石寺の巖をよめる

昔より幾としふるか知らねごも
　み寺のいはほ動かざりけり

秋香

ちよのいろはくもににほひて名も高く
　峯にそばたつまつしまの寺

加茂

もみぢ川もみぢしぬれば水上の
　面白山も名のみなるらむ

徳隣

瀧のおとまつのあらしもちりの世の
　ほかに暮れ行く山寺の秋

七十六翁　千族

うちつけにふるやあられの瀧つせは
　夏もみにしむこゝちこそすれ

山寺の名は昔より立谷川
　みのりの影を世に流しつゝ
雷　瀧
水上は松のあらしに雲はれて
　とよみあやしき雷の瀧

手束杖ひきてとはばや名に高き
　立石寺の春のけしきを
題立石寺
かねの音もたきのひひきも今は世に
　高く世に立石のやま寺
　立石寺をよめる

高梨惣助
直枝
通禧
源通久
茗園

むかしより消えぬ御法のともしひは
　この山寺のひかりなりけり
八十七翁　直彦

御佛のひらき給ひしいてはなる
　此山寺は世にさりけり
眞彦

鳴神のたきの音す也世に高き
　なに立石の山もとごろに
吉胤

世の塵をよそにへたてゝ立石の
　たからの山の名こそ高けれ

山寺や岩にまけたる雲の峰
桃鄰

山寺や蔦も榎も皆古風　仙化

山寺や人這ひかゝる蔦かつら　風仙

立石寺に詣て芭蕉翁の蟬塚を拜す

身にしむは只秋風や昔今　仙化

蟬塚の昔なつかし苔の花　極處

郭公鳴くや雲井の立石寺　不忍

山寺に登り閑さやの高吟にすかりて

身に入るやいはほも通す鐘の聲　乙年

山中の春のひゝきや鐘の聲　狂雷堂顧十

尊さや松のひまより華の雲　石月

靈窟を生れて出しか寶とゝきす　中壺

巖にさけば巖の華よすみれ草　野田大塊

立石寺に遊ぶ

庭の樹々水音月の物ならむ　極處

一日の心を得たり露の秋　魯石

只秋の山寺でなし鐘の聲　桑月

手を伸へて月をとらはや五大堂　壺中

水の外四隣音なし子規　野田大塊

山寺や鐘に呼ひ出す時鳥　普宰

山寺や慈悲の栗飯法の味　溪雪

眼を閉て山寺拜む風呂塲哉　無柳庵

駒鳥鳴くや巖聳えて狹き空　聽秋

寶珠山上の歌碑

雨雲のちきれて涼し暮の山　公羽

行秋や雲見て居れば鐘の鳴る

身にしむや巖に響く鐘の聲

たのしみも身のほと〳〵の花見哉　白壽坊
埋み殘すものあり雪の朝烟り　雪山
吹く風のひそかに寒し梅の花　靈樹庵
流れから風のあかるや夏座敷　雪山
月を吐く雲からさつと時雨かな　友蘇坊
霞野や人いくむれも〳〵　同人
行秋や荒れて田畑の只廣し　白蘇坊
眼の欲に日はまだ高し花の山　溪雪
又もとの土に戻れる落葉哉　螢雪未文
待つたぞや其の音信をほとゝきす　乙年
團扇あてゝ丸さくらべつ夏の月　周鶴
花見ては花に忘るゝ其の日哉　風草
樂書は笹の葉にある清水哉　二丘

花さかぬ草木から風薫りけり　川丈
左羽に夕日受けつゝほとゝきす　一具庵
澄む秋や旅に汚れし氣なからも　風爐坊

立石寺　田口江村

立石奇狀催窮追。略擧一二千百遺。巧想吳匠脩月。餘材積屜㕓。宗柄柱櫨種々具。蘿綿苔紋年々施。怪怯夜叉守關。楯戟立窺覗。蒼面鐵臂髮猙獰。陰氣爲團黑風吹。大驚巨靈千丈。穿胷開胎容群兒。幻迷天狗一足。躡雲舞風翅參差。亘蟒呑山挑獨頭。老蟇睨月張空頤。或是老禪獨鈷始開山。魑魅罔兩苦鞭笞。遁形盡入石間藏。時々變眩弄嬉戲。吾聞洪濛初。磐古始死四體披。目爲日月口江海。山岳累々是其枯骴。後來有蚩尤。狂憤偶觸之。山骨忽碎天柱傾。女媧蒼皇無暇支。急采石五色。淘鍊補天墜。其餘頑碌嵬鎖。盡取投之東海陲。萬弩潮頭相激射。硲

研空洞發奇姿。目今羽山千萬里。當時蒼海渺無レ涯。不レ然是岩爭帶潮痕爲。造物妙用天不レ測。世間蠢菌徒少レ知。防風專車近時耳。吳兒錯愕費二阻疑一。何況蒼海生レ塵彈指頃。麻姑大息蔡生嗤。吾知十二萬年後。渾沌會有二再成時一。群鑿消盡萬竅合。磐古體完醇變レ漓。此理當然數豈無。君如不レ信看二吾詩一。

宿山寺　釋知城

禪窓高倚亂雲層。坐看上方明月昇。
深夜不レ眠聞二梵唄一。一心五濁自清澄。

立石寺　大石玄洋

雲成二五色一繞二層峯一。瑟々山風千萬松。
老衲延レ吾開二澗戸一。上方早已夕陽鐘。

遊立石寺　窪田松門

山寺便知幽趣長。松陰留レ我坐二胡床一。
蕉翁去後無二名句一。寄題立石寺
古塔千年倚二翠微一。騷人停レ筆題難レ得。

山寺　黑田長成

大師靈窟白雲邊。不レ間乃知迎レ鶴處。
寄題立石寺　寶珠山靜日如レ年

江舟生

突兀摩レ空立石寺。百丈拔レ地馬塔巖。
斷崖嶄絕眞鬼削。危壁峻極是神劖。
一鳥不レ飛風浩々。鐵鎖難レ攀碧巉々。
天狗晝吼陰洞口。瀑雷劈破白雲緘。
花磵春藏金銅佛。楓川秋晒錦繡衫。

亂山鐘沈諸天寂。
緬想高僧入二關北一。

題立石寺

寶珠山景秀而幽。
遙對馬溪羅漢寺。

寄題立石寺

水自紛飛山自奇。
因緣非レ及二吾曹遠一。

題寶珠山立石寺

無人境自有二靈區一。
草創貞觀聖朝代。

明治丙午仲春題立石寺

靈境寶珠山石間。
群壑曰黑千年杉。
披得太古神秘畫。

無窮

活畫令二人憶一雪舟一。
靈光赫々一千秋。

八十一迁生披雲

無邊勝景故參差。
難レ得忘レ機賦二小詩一。

永平悟由

立石全山盡寶珠。
神劒鬼削秘二幽隅一。

魯庵信庸

奇巖幽勝自仙寰。
穿レ雲飛瀑懸如レ霧。

上立石寺

無數懸崖帶二夕曛一。
千年古佛留レ眞處。
丹青燦爛古禪關。
仰想清和皇帝德。

立石寺

古佛經行地。秀靈名蹟存。
群瀑水龍奔。幽窟昔修定。
寶珠千載後。餘照耀二乾坤一。

寄題立石寺

未レ看山寺景。山寺夙知レ名。
到處便開遊子顏。

七十三翁 仙洲

鐘聲渡レ樹隔レ溪聞。
百丈巖頭有二白雲一。

南海隱士

趣在二靈巖怪石間一。
千秋徧燿寶珠山。

黑田春明

一山巖虎立。
危磴令駭魂。

峯

日自二洞門一出。

雲從二脚底一生。　戛々吟客駭。　磊々俗人縈。
一値二大師手一。　靈奇天下鳴。

立石寺　志水匪石

磴擊二精舍一鎖條斜。　巖竦二太虛一雲半遮。
百瀑喝頭迷悶破。　一潭徹底智心加。
素眞寶塔留二鸞鳥一。　慈覺靈蹤走二蟄蛇一。
莫レ怪纖塵無二着處一。　大千界裡降二妖邪一。

寄題寶珠山立石寺　省軒行

瀑鳴山若レ震。　雲起寺將レ無。
高衲修レ眞處。　蒼龍擊二寶珠一。

寄題立石寺　淡湖田池澂

雲護二靈場一塵不レ侵。　幾多堂宇自清森。
法門感化眞堪レ服。　步々生來解脫心。

題立石寺圖　晉香熊田翰

元氣凝結山崔嵬。　無二是鷲嶺之飛來一。
不レ然不周觸レ頭日。　存二此突兀一支二天頹一。
寒碧摩レ雲々爲墜。　巖容石態皆怪異。
有レ如二巨人掣二老魁一。　有レ似二大鵬鼓奔翅一。
蒼崖裂爲二四十瀑一。　艸龍吐レ涎腥二溪氣一。
勝境一見高僧窺。　排二得雲幌一披二霞帷一。
靈空忽見現二樓閣一。　天花掩映碧琉璃。
誰寫二靈秀一入二咫尺一。　萬里溪山青歷々。
安得二山上題一新詩一。　一齊點頭千巖石。

寄題立石寺　西里永田莊

貞觀遺風繫二梵音一。　巍峩立石想二祇林一。
長廊響絕幽殊寂。　老樹塵無靜更深。

青繞二寶欄一山萬疊。
遙知景勝靈鐘レ美。

仝

立石山中寺。　懷哉創始年。　嵩古香
跡在二釋書一傳。　寶座雲垂レ幔。　名因二貞觀一起。
我虧靈運屐。　假夢結二眞緣一。　晶簾瀑掛レ泉。

題寶珠山立石寺

立石名藍冠二東北一。　雲間堂閣上應レ難。　青松廣莽
緣維慈覺安禪地。　峻嶺衝レ天一劍寒。
峰巒昔說鬼神刪。　時有二高僧開一梵關一。
塔鐸風磨聞二樹杪一。　嵓樓雪盡矗二溪間一。
奇芬靈草天邊秀。　異彩慈雲眼底閑。
貞觀年中因レ勅建。　永看東北古仙寰。

寶珠山

絕巘名刹在。　鐵鎖縋攀登。　小豸潛史勝藏
佛龕倚二石稜一。　襲藏天海簡。　妖樹立二雲表一。
千載開二斯境一。　台宗二祖僧。　分受叡山鐙。

題立石寺眞景

煙嵐縹渺望偏奇、　耕云三谷仲
峭壁危嵓不レ可レ狀。
愧卷二風光一入二小詩一。　大覺王世尊八十一世法孫　山形
丹靑難レ借黃倪筆。

讀山寺攬勝志

今歲東都觀二此圖一。　九峯高島張
去年北地望二其寺一。
何如二開祖德高一乎。
怪石奇巖雖レ可レ賞。

羽前山寺之勝耳レ之久矣、而未二一遊一。頃有二寄攬勝志一者一、首置二靑萍博士詩一。因次其韻一

絶壑懸泉行逕微、
爐壇千載老龍護、
晉香熊田君示二岡千仞新著山寺攬勝志一。見レ囑二寄題一。因賦レ此兼寄二
千仞翁一。時明治三十九年三月

鎭西長崎暘琴石齋西道仙時年七十一

天下偉觀屬二此山一。名藍巍立一千年、山號寶珠寺立石、危殿飛閣與レ雲連、
覺師奉レ勅所二創建一。御塔千古半空懸、山掛二一瀑一亦爽快、況有二五十五瀑泉一。
海內多少名勝境、古來隱見有二後先一。隱見由レ人不レ賴レ地、山志一出天下傳、
不二獨勝境由レ人顯一。名士隱見亦復然、吾讀二山志一神發越、欲レ踞二斷崖絶壁巔一。
某巖某瀑不レ遑レ數、瀑怒巖吼篇幾篇、著レ之者誰岡千仞、一別多年隔二岳蓮一。
驚君筆勢老愈壯、不二啻銀河落一九天一。昨夢探レ勝八千里、與レ君騎レ鶴過二羽前一。
五十五瀑見不レ見、千巖萬壑小レ於レ拳、飄々同舞二天風一下、縱遊且作二地行仙一。
忽見四十有八瀑、激而噴レ雪散如レ煙、或喚二藤花一或楊柳、雷奔蛇折爲二楓川一。

滿山紅葉鏡レ于レ水。奇彩煥爛照二坤乾一。高六十尺石橋峙。自成二寶門九重淵一。
其長一百五十尺。誰知一石天造全。溪流至レ此如二虎鬪一。所レ觸巉巖盡鑿穿。
又見七瀑最寄峭。不レ假二鐵索一絶頂攀。諸瀑轟レ雲不二唯七一。雲擁二深源一鎖二天關一。
擧二此大略一稱二三絶一。其他群山望無邊。興酣長嘯拂レ衣去。一雙白鶴立二松肩一。
二人遙拜御寶塔。誰奏二古樂一舞蹁躚。梵鐘一聲遽然覺。恍惚疑是在二仙寰一。
却憶帝力及二靈窟一。本寺門扁關北靈窟陵谷終古無二變遷一。

讀山寺攬勝志書感　栗里逸士喬

久聞立石寺山奇。　今見二寫眞一如レ列レ眉。
濟勝具存難レ脫レ絆。　雄飛探討果何時。

寄題立石寺　下毛宇都宮七十四翁　堂義

千年古跡秀二雲寰一。　樹色層々綰二翠鬟一。
七瀑三嵓極奇絶。　天然琢出寶珠山。

遊山寺　高橋文山

白衣飄々探二泉流一　山光翠色境更幽。
果知千年古寺跡。　嶂徑苔滑神仙遊。
祛レ襟洗レ耳散二俗悒一。　吟情披鬱嘯二谿間一。
巉岩万仞老松峙。　鳥啼猿語傳二四山一。
飛泉瓏々如レ咽レ淚。　精魂可レ磨可レ養レ志。
誰言馬谿天下稀。　羅漢豈何當二山寺一。

寶珠山雜吟之一　菊畦野人

巍然梵宇倚二崔嵬一。
關北靈場獨占レ魁。
虚廊寶閣莊巖列。　怪石奇松圖畫開。
鳥背時攀二雲棧一去。　猿肢或縋二鐵條一來。
勝區添レ勝尤堪レ喜。　隙地新栽萬樹梅。
幾度學レ仙難レ得レ仙。　寶珠山上履二雲烟一。

遊山寺寶珠山房即矚　綿引東海

奇巖靈石三千丈。　天外初知別有レ天。

古曆九月十八日陪二筠軒先生一遊二寶珠一峴南菊畦松雲來會分二山光澄我心五字一爲レ韻余得レ山

遊笻咫尺接二天關一。　巖石崢嶸錦爛班。
好拉二韻流一探二鬼窟一。　欲下霏二談屑一落中人寰上
磬聲寒出亂松外。　雲影白縈紅樹間。
至竟闡幽吾輩事。　不レ妨嘯傲賦二名山一

得光　竹內峴南

怪巖奇石幾低昻。　誰起二初平一叱レ化レ羊。
杉檜煙披紅葉峽。　蔦蘿風拂白猿梁。
短歌擊レ節百壺酒。　長嘯振レ衣千仞岡。
此處登臨眞快濶。　未レ言倦眼怯二秋光一。

其二

依稀天籟奏二宮商一。
巖岫平臨雲出沒。
山高呼吸容二三界一。
好倩二筠翁一枝筆一。

得澄

樓臺十二倚二峻嶒一。
局促久違方外約。
地安二傑閣一佛威貴。
黃葉夕陽秋寺靜。

其二

滿地晚楓霜氣凝。
誰持二世道一挽二頹俗一。
嵐翠霏微自滴レ床。
石欄俯瞰鶴翱翔。
寺古威靈耀二八方一。
丹青畫出此風光。

逸見松雲

燈道千尋穿レ屐登。
携提重得社中朋。
山捧二寶珠一雲氣騰。
發二人深省一磬聲澄。

開山堂下感二衰興一。
猶喜佛門挑二一燈一。

啼鳥空憐埋骨塔。
三生因果悟不レ得。

得我

曾游夢記菩提果。
慧日將レ烘萬樹霜。
飛岩傑閣佛三尊。
無二乃靈山未了因一。

其二

老猿來瞻仙壇果。
勿レ看賡歌賁二墜丘一。
白雲幾縷掠二眉稜一。
獨愧心腸冷且頑。

得心

老猿時學坐禪僧。
惟覺湛々心海澄。

大須賀筠軒

又向瀾秋結二趺座一。
法燈不レ滅千年火。
危嶂高欄雲數朶。
寶珠如意重招レ我。

高閣恍疑天上坐。
絕無二一語帶二煙火一。
清磬數聲來二耳朶一。
千年古佛何二如我一。

西川菊畦

孤亭突兀倚二嶅岑一。
關北靈塲宜二嘯詠一。
交二加楓柏一岩肩聳。
世上榮枯渾不レ問。

同次筠軒先生韻　西川菊畦

又向二禪關一尋二淨果一。
千秋事業鵲塡レ河。
帶レ雨歸雲白萬羅。
欲レ裁二佳句一愧二韭才一。

同上

山寺看レ楓曾約果。
好將二得失一付二鷄蟲一。
圍燈唐家錦繡屏。

萬壑霜寒秋氣沈。
海東名士共登臨。
呑二吐雲烟一洞口深。
超藏物外薜蘿心。

西川菊畦

沈吟此處忘レ機坐。
一世功名蛾赴レ火。
飽レ霜老樹黃千朶。
默禱山靈來助レ我。

竹內峴南

一瓢撫レ景團欒坐。
不レ問光陰飛二石火一。
映レ欄海客珊瑚朶。
深霜染出畫中天。

山寺

巉岩突兀千疊山。
白雲埋レ谷又吐レ嶽。
但見兩崖聳二碧巔一。
拾二精舍立石寺一。
一眸遠望村山地。
義光雄圖沃野遠。
憶昔慈覺設二精舍一。
不レ知人間攀二仙境一。
君不レ見馬溪風光溢二海內一。
此山別有二天狗岩一。
白雲往返付二天然一。

滿眼光輝偏眩レ我。

上村節山

凌レ雲重翠如二水煙一。
雲煙散處山超然。
中有二巨刹之金仙一。
溪路羊腸涉二流泉一。
黃靄更開霞城邊。
藻江蜿蜒勢呑レ天。
於レ今風霜一千年。
風光清絕悟二老禪一。
山陽先生遊一篇。
翠松交レ花更娟々。
好山千嶂千古景。

武陵桃源在二羽前一。
勝景何在二馬溪篇一。

寄題立石寺　釋清潭

巖角千年掛二玉環一。
轟々其響震二人間一。

大瀑法雷聲不レ盡。

山寺雜詩五首　佐藤松窓

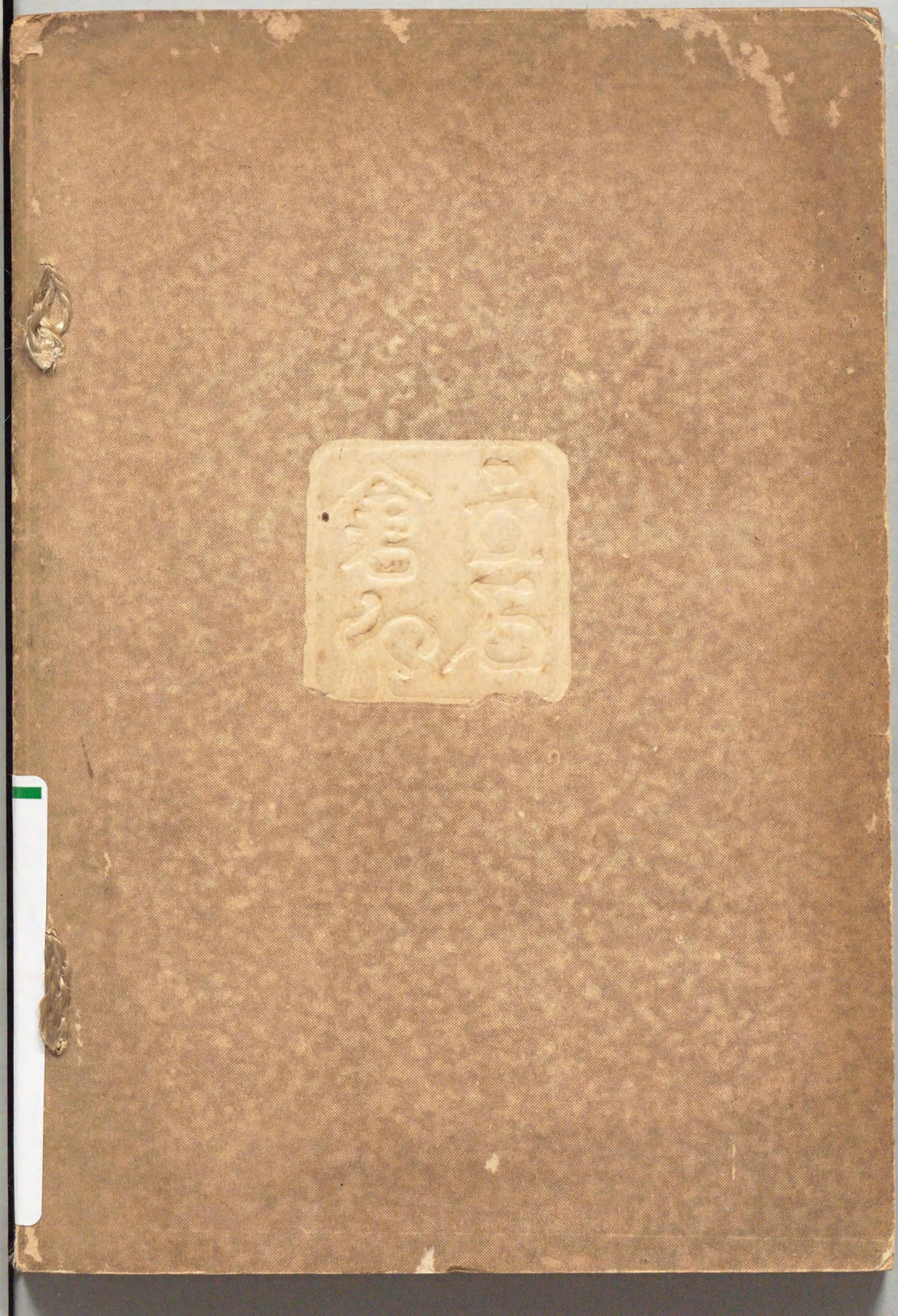
珠嶽何蒼鬱。千年法象開。
絕壑澗聲回。龍護育王塔。
偉功想二創業一。欽仰昔人才。
一路登攀仄。千嵓氣象雄。
靈佛住二崆洞一。杖屨青雲表。
林風過二霎雨一。獨立嘯二蒼穹一。
磴道石千級。木魚秋半林。

夙令二先生見一此美一。

松翠帶二寒陰一。悠々古佛心。
搜冥人境外。洞口暮雲深。
冥思寄二悠邈一。爽藏塵念空。
老樹蓄二嵓風一。淨寶參二支遁一。
滿山秋浩々。松色白雲中。
幽探探壑囊。吟嘯亂峯前。
穿レ雲嗽二石泉一。夕陽無レ限好。
徒倚撫二煙景一。慚無二錦繡篇一。

明治四十一年九月十三日印刷
明治四十一年九月十六日發行
大正十四年九月十八日再版

複製不許

著發者兼 山形縣羽前國東村山郡山寺村 伊澤榮次
印刷者 東京市淺草區老松町八番地 山內只七
印刷所 東京市淺草區老松町八番地 昇陽舍
電話淺草四八五八番

發行所 山形縣羽前國東村山郡山寺村一八一四番地 寶砚堂